

ノーベル平和賞受賞演説を教材として

マララ演説音読授業の試み



岩間龍男

岐阜県立高校（全日制普通科）

目次

第一部 「リズムよみ」との出会い	
(1) 突然の一本の電話	2
(2) 歌のリズムよみ	2
(3) ディクシー・チックスの Traveling Soldier	3
(4) 困難な教科書のリズムよみプリントの作成	7
(5) 全く音読をしなくなった生徒たちを目の前にして	7
(6) 校長先生からのアドバイス	8
第二部 教科書の「リズムよみ」はどのように行われたのか	
(1) 教科書の「リズムよみ」音読テストはどのように行われたのか	9
(2) オリジナル作文に出てきた衝撃的な生徒の本音	1 1
(3) 個人レベルでの実践から学年レベルの実践へ	1 3
第三部 マララ演説音読授業の試行実践（3年生の授業）	
(1) マララのノーベル賞受賞演説との出会い	1 4
(2) 実施クラスについて	1 5
(3) 授業の概要	1 6
(4) 1時間目の授業（2015. 1. 9）	1 6
(5) 2時間目の授業（2015. 1. 13）	1 7
(6) 3時間目の授業（2015. 1. 16）	1 7
(7) 授業の後、思ったこと	1 9
(8) 授業実践の記録をすることについて	1 9
(9) 教材としてのマララのノーベル賞受賞演説への懸念 （追記）	2 0 2 0
第四部 マララの英語音読授業の準備はどのようになされたのか —山田昇司先生との対話—	
(1) マララ演説を学年全体で行うことになった経緯	2 0
(2) 授業計画はどのように立てられたのか（2015. 1. 25）	2 1
(3) 読解プリントはどのように作成されたのか（2015. 1. 29, 30）	2 3
(4) 「リズムよみ」プリントはどのように作成されたのか（2015. 2. 7）	2 8
(5) 発音のカナ振りをめぐって（2015. 2. 13, 14）	3 4
第五部 マララの英語音読授業はどのように行われたのか	
(1) 準備した教材	3 6
(2) 授業の概要	5 0
(3) 1時間目の授業（2015. 2. 16）	5 0
(4) 2時間目の授業（2015. 2. 17, 18）	5 3
(5) 3時間目の授業（2015. 2. 18, 19）	5 4
(6) 4時間目の授業（2015. 2. 19, 20）	5 6
(7) 群読はどのように評価すべきか（2015. 2. 21） —（続）山田昇司先生との対話—	5 7
(8) 5時間目の授業（2015. 2. 23）	5 9
(9) 6時間目の授業（2015. 2. 24, 25）	6 1
(10) 生徒の感想より	6 3
(11) 授業を終えて	6 5
おわりに	6 5

第一部 「リズムよみ」との出会い

(1) 突然の一本の電話

昨年(2013)の11月頃のことであっただろうか。何年かぶりに突然、山田昇司先生から電話を頂いた。用件は、最近本を出したので送付したいから住所を教えてくださいとのことであつた。「大学の授業実践をまとめられた本ですか？素晴らしい！本が届くのを楽しみにしています」と私は答えた。その本『英語教育が甦えるとき』(2014 明石書店)が送られてくると、すぐに私は興味深く読ませてもらった。本の中に出てくるほとんどの先生は、私も存じ上げていた。そういう点でも興味深い本であつた。また、山田先生は長年にわたり、寺島メソッドを使っての実践を深めてこられ、その実践の現在の到達点を示しているという点で、私としても新しい発見があつた。そして何よりも山田先生の授業に立ち向かう熱心さに強く心を打たれた。

山田先生は、今は大学で教鞭を取っておられるが、かつては私と同じ高校の英語教師であつた。先生と初めてお会いしたのは、おそらく25年以上も前のことだつたと思う。教職員組合主催の一泊学習会で、夜の休憩時間に私と同じ部屋で彼は何やら難しそうな本を読んでいた。表紙を見ると『英語にとって学力とは何か』(1986 寺島隆吉著・三友社)という本だつた。山田先生に話しかけて、その本を見せてもらったら、何かとても面白そうな本だつたので、「面白そうな本ですね。読みたいなあ」と言ったら、「なんだったらこれ持っていけますか。私はまたすぐに入手できますから」と言われて、その本を譲ってくれた。せっかく空いている時間に読もうとしていた本を、私は取り上げてしまった。なんとという親切で気のいい先生だと思ったことを記憶している。このときに、山田先生から「記号研」という英語教育の研究会があることを教えてもらった。この研究会には、私も一定期間参加させていただいたことがある。その中で寺島隆吉先生(元・岐阜大学教授)が考案された「リズムよみ」という音読指導方法があることも知つた。

(2) 歌のリズムよみ

「リズムよみ」については、最初は歌から始めるといいということが言われていたので、もう10年以上前のことであるが、前任校で歌を何度か授業に取り入れたことがあつた。

「総合学習」という時間があつて、教師の得意分野でなんでもいいから講座を作り、希望の生徒を集めて生徒に学習をさせるという取り組みがなされたことがあつた。私は「英語の歌」の講座を作って、1年間に15曲から20曲の歌の授業をしたことがあつた。この時は、当時の記号研の先生が作成した多くの歌の記号付けプリントを最大限に利用させてもらつていた。授業といつても、テストはなく、ただただ講座を進めていくものであり、カルチャーセンターのカラオケ講座のようなものである。この時の大雑把な授業手順は、以下のようであつた。

- ①歌のCDを聞く
- ②歌詞のリズムよみ練習をする
- ③CDに合わせて歌ってみる
- ④語順訳穴埋めプリントをやり、歌詞の意味を知る
- ⑤再度CDに合わせて歌ってみる

このパターンで、歌を授業にも取り入れた。授業では、上記に加え、歌詞の10回視写とか、歌の暗誦歌唱テストを行ったと記憶している。(当時、この学校には英語科があり、そのクラスでこの授業は行つていた。)

「リズムよみ」とは、ペンを等間隔で打ちながら、下記の表の英文の上についている大きな記号の部分強く読む読み方である。

リズム記号を見ると、規則的に強が出てきていることが分かる。(1)(2)の2種類の記号付けがあるが、(1)は英語音声の原則に従った強勢の位置、(2)は音楽のルールに従った強勢の位置を示している。

(1)の英語音声の原則については、『英語にとって音声とは何か』(2000 寺島隆吉著・あすなろ社)のp.15-p.16の一部を引用しておく。

①英語ではひとつの強いところ(文強勢 sentence stress)から強いところまでは、その間の弱い

ところに関係なく、ほぼ同じ時間で読まなければならない。

- ②文全体のリズム（文強勢）が個々の語のアクセント（語強勢 word stress）より優先する。特に強勢のある音節が続いて出てくることを避ける傾向がある。
- ③文中で強勢がおかれるのは、一般に意味の上で重要と考えられる語である。したがって特別な意味上の強調のない普通の場合には Content Word（内容語）に強勢を置き、Function Word（機能語）には強勢をおかない。

内容語とはふつう名詞・指示代名詞。形容詞・本動詞・副詞・疑問詞をさし、機能語には人称代名詞・関係代名詞・冠詞・助動詞および be 動詞・have 動詞・前置詞・接続詞がある。

(2) の音楽のルールというのは、4拍子であれば強弱強弱と1拍目と3拍目に強勢が置かれ、3拍子であれば強弱弱と1拍目に強勢が置かれ、2拍子であれば強弱と1拍目に強勢が置かれる現象を指している。したがって、[2]のリズムよみをしてみると、音の高低がないだけで、ほとんど歌と同じリズムで読めるので、歌を歌うときにはお勧めの「リズムよみ」の方法であると言える。しかし、リズムよみは[1]の英音法による強勢の位置を使つての読み方のほうが音読は容易である。「ドレミの歌」は私もこのシリーズの授業でも扱ったが、リズムよみの「定番」になっている典型教材である。これは2拍子の曲で、一拍目を強にすると[2]の記号付けとなる。したがって、このパターンの歌の記号付けは楽譜さえあれば機械的に発見できる。

<https://www.youtube.com/watch?v=6m7wvnDAHUM>

[1]英音法による強勢の位置

[2]音楽理論による強勢の位置

□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
Doe, a deer, a female deer	Doe, a deer, a female deer
□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
Ray a drop of golden sun	Ray a drop of golden sun
□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
Me, a name I call myself	Me, a name I call myself
□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
Far, a long long way to run	Far, a long long way to run
□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
Sew, a needle pulling thread	Sew, a needle pulling thread
□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
La, a note to follow sew	La, a note to follow sew
□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
Tea, a drink with jam and bread	Tea, a drink with jam and bread
□・ □・ □・ □	□・ □・ □・ □
That'll bring us back to doe	That'll bring us back to doe

(3) ディクシー・チックスの **Traveling Soldier**

このころ授業で取り上げた歌で最も印象的だった曲は、ディクシー・チックスの **Traveling Soldier** という曲であった。この頃がいつだったのか正確に思い出せないけれど、2001年の9.11事件の後に米国がアフガニスタンとイラクを攻撃していた頃であった。アフガニスタン攻撃が始まる直前に、オノ・ヨーコさんが巨額を投じて、ニューヨーク・タイムズの一面全部を使って、ジョン・レノンの **Imagine all the people living in peace** という歌詞の一節を掲載したことが、鮮烈に私の記憶に残っている。そして、この **Imagine** の曲は米国ではテレビとラジオでの放送から排除されることになり、その他の数多くの歌も同様の扱いを受けた。米国政府はベトナム戦争で国内に空前の反戦運動が展開され苦境に立つことになった苦い教訓から、戦争を遂行するときは戦争の実態を伝えたり、戦争反対のメッセージを伝えるメディアの規制をするようになっていた。

ディクシー・チックスの **Traveling Soldier** も米国メディアでの放送から排除された一曲である。ディクシー・チックスの2003年のコンサートで、そのメンバーの一人ナタリー・メインズは米国大統領のジョージ・W・ブッシュのことを「私たちはテキサスから大統領がでたことを恥じています」と発言して、物議を醸しだした。そしてこの歌があることを、私はマイケル・ム

ーアのホームページの彼の記事を翻訳している時に発見して、その曲を授業で使うことにした。この曲はカントリー風の曲で、歌うのはなかなか難しいけれど、歌詞がひとつの物語となっていた。高校を出たばかりの米国の青年が、カフェで知り合った少女とのほかない恋の後、米国の行ってた戦争に兵士として参加し戦死をしていく悲劇を、その少女の眼差しから描いたこの曲に、私は大きな感動を受け、この曲を歌の授業で生徒たちに紹介した。当時、この曲はかなり流行った曲であったが、その曲が米国では放送の自粛が行われていた理由も生徒に話してやった。久しぶりにこの曲を You Tube で聞いてみた。胸に迫るものがあった。

<https://www.youtube.com/watch?v=AbfgxznPmZM>

当時使ったプリントを見ると、これにはリズム記号は付いておらず、コーラスの部分のみにカナ振りがされている。この曲を授業で扱った時は、リズムよみはせず、コーラス部分の歌唱練習と、歌全体の歌詞の意味を取らせる作業に力を入れたと記憶している。コーラス部分の最初の **I cried** のところの **I** の部分の発音が長く伸ばされているのが印象的であった。私の授業に出ていた女生徒が、休み時間にこの曲のこの部分を口ずさんでいたのを耳にした。

いずれにしても、10年以上前の当時の自分を思い出すと、荒削りではあっても感性が研ぎ澄まされていて、何事にもチャレンジ精神を持っていたような気がする。そして学校と家を往復する平凡な生活の中にあっても、その時代に生きる者として米国の戦争政策への異議申し立てをしたいという生意気なことを考えていた。まさに **Think Globally Act Locally** を実践しようという気概に満ちていた。それに比べ現在の自分のこの落ちぶれようというか体たらくを思う時、反省することしきりである。

Traveling Soldier by Dixie Chicks

1. Two days past eighteen

He was waiting for the bus in his army greens
Sat down in a booth in a café there
Gave his order to a girl with a bow in her hair
He's a little shy so she gives him a smile
And he said would you mind sitting down for a while
And talking to me, I'm feeling a little low
She said I'm off in an hour and I know where we can go
So they went down and they sat on the pier
He said I bet you got a boyfriend but I don't care
I got no one to send a letter to
Would you mind if I sent one back here to you

2. (Chorus)

I cried
Never gonna hold the hand of another guy
Too young for him they told her
Waiting for the love of a traveling soldier
Our love will never end
Waiting for the soldier to come back again
Never more to be alone when the letter says
A soldier's coming home

3. So the letters came from an army camp

In California then Vietnam
And he told her of his heart
It might be love and all of the things he was so scared of
He said when it's getting kinda rough over here
I think of that day sitting down at the pier
And I close my eyes and see your pretty smile
Don't worry but I won't be able to write for a while

4. 2 番の繰り返し

(間奏)

5. One Friday night at a football game

The Lord's prayer said and the Anthem sang
A man said folks would you bow your heads
For a list of local Vietnam dead
Crying all alone under the stands
Was a piccolo player in the marching band
And one name read and nobody really care
But a pretty little girl with a bow in her hair

6. 2 番の繰り返し

7. 2 番の繰り返し

以下は、岩間の訳です。

1. 18歳の誕生日から2日後に

彼は、緑色の軍服を着て、バスを待っていた
彼は、喫茶店のそこに座って
髪の毛にリボンをつけた女の子に注文をした
彼は、少し照れ屋だったので、その女の子は彼に微笑んだ
そして彼は言った「ちょっとここに座ってくれないか」と
「ぼくに話をしてくれないか。ちょっと、気持ちが沈むんだ」
女の子は言った「あと1時間で仕事が終わるから、(話をする)いい場所を知っているから」
そして彼らは桟橋に座っていた
彼は言った「君にはきっとボーイフレンドがいると思うけど、僕は気にしない」
「僕は手紙を出す人が誰もいないんだ」
「君に手紙を送ってもいいかい？」

2. 私は泣いた

別の人の手は決して握らない
皆は私は彼には若すぎると言うけれど
私は放浪している兵士の愛を待っている
私たちの愛は絶対に終わらない
その兵士が戻ってくるのを私は待っている
私は決してひとりぼっちじゃない、だって手紙がきたのだもの
その兵士が帰ってくるという

3. 軍のキャンプから手紙が来た

カリフォルニアからの、そしてベトナムからの
彼は自分の心のうちを彼女に打ち明けた
それは彼女への愛だったかもしれないし、彼が怯えていたあらゆることだったかもしれない
彼は言った「戦場で、ちょっとつらくなる時」
「僕はあの桟橋に座って(君と話をした)時のことを思い出すんだ」
「僕は目を閉じ、君のかわいい微笑みを思い浮かべるんだ」
「しばらく手紙を書けないけど、心配しないでくれ」

4. 2 番の繰り返し

5. フットボールの試合のあった金曜日の夜

主の祈りが述べられ、そして国歌が歌われた
場内アナウンスがあった「黙とうをお願いします」
「ベトナムで戦死した兵士たちのために」

マーチングバンドのピッコロ奏者が
スタンドの下でただ一人泣いていた
一人の兵士の名前が呼ばれたけれど、誰も特に気にならなかった
髪の毛にリボンをつけたかわいい女の子を除いては

6, 7 2 番の繰り返し

上記のこの歌の記事について、山田先生と以下のメールのやりとりをした。

岩間先生

先生の紹介された歌が気に入っていくつも Youtube を聞いていたら、歌詞が出るところがあり、2 箇所
で誤植があることが分かりました。

https://www.youtube.com/watch?v=1a-9kUFPsRg&feature=player_detailpage

歌詞の中に書き込んでおきます。こうすると文法的にも説明可能です。

2 の Chorus の最後

★ A soldier coming home → A soldier's coming home

5 の後ろから 3 行目

★ Were piccolo player in the marching band → Was a piccolo player in ...

歌の訳の部分

主の祈りが述べられ、そして★国家が歌われた → 国歌

2015年3月9日 山田

山田先生

Traveling Soldier の誤植の指摘ありがとうございます。訂正しておきます。
私も再びこの曲を何度か聞きました。本当に切ない歌です。この歌はフィクションですが、ほとんど同じようなことが現実にはあったのではないかと思います。歌詞の中の若者はベトナムで戦死したことになっています。ベトナム戦争ではベトナム人は数百万人が殺害され、米軍兵士は6万人近くが戦死したとされているので、その中に歌の中に出てきたような米軍兵士がいたとしても、不思議ではないと思います。

この歌詞を聞いていたら、『ルボ貧困大国アメリカ』（堤未果著・2008 岩波新書）の中で、高校生が軍に巧みにリクルートされていく仕組みが記述されていたことを思い出しました。この本の記述とこの歌の歌詞が重なりました。この歌はディクシー・チックスがブッシュ大統領を批判したことから考えても、反戦のメッセージだと私は思っていました。ところが、聞く人によっては、この歌は国のために戦った愛国者の兵士を讃える歌と理解している米国人もいることがわかりました。

山田先生が見られた You Tube では、この中の歌詞の前に、最初に次のような下りがあります。
Dedicated to all who are fighting or have fought for our country.

あるいは、歌詞のある You Tube の上とは別の次のページも見ってみました。

<https://www.youtube.com/watch?v=uPaNZ8wFYbE>

歌詞の後に次のようなコメントがありました。

**This song was meant for those who lost someone
someone special in the war**

It has very powerful words and it is a classic love story!

So enjoy your life and don't forget our troops

Because if it wasn't for them, we wouldn't have a FREE COUNTRY.

同じ歌でもこのように理解することもできるので、この歌は両刃の刃にも成り得ることを知りま

した。

2015年3月9日 岩間

(4) 困難な教科書のリズムよみプリントの作成

この歌のリズムよみと同じように、教科書でリズムよみをしようとしたことがある。そのためには、リズム記号を付ける作業をしなければならなかった。その作業を私は当時やってみたのだが、どうしても自分として納得のいく「リズムよみ」の記号付けに到達できなかった。それにその作業には本当に時間がかかった。そんなこともあって、当時、私は教科書のリズムよみを断念してしまっただ。

以上が私が「リズムよみ」と出会ったころの様子である。その後、読解プリントは記号付けのものを使用していたが、しだいに「記号研」からも遠ざかり、我流で授業をこなしてきた。その私が何故、再度「リズムよみ」を採用することになったのかの経緯を述べたい。

(5) 全く音読をしなくなった生徒たちを目の前にして

今年は2年生で「コミュニケーション英語」4単位と「英語表現」2単位の授業を行っていた。「英語表現」というのは、旧課程で「Writing」に当たる授業で、文法作文といった内容だ。その授業で、例文を音読するときがあった。ところが、あるクラス(Cクラス)で、私のモデル・リーディングの後について読む生徒が誰ひとりとしていなくなってしまうことがあった。「授業にならないから、声を出しなさい」と何度警告しても、やはり誰も読もうとしない。私は何時間か冷や汗を出しながら、授業をした。

さらには、英作文なので、Exercisesの英作文を生徒に指名して黒板に書かせることもしていた。ところが、当てても誰も書きに来ない、いや書けないという状況が各クラスで出てきた。仕方がないので、「私はヒントをあげるのだから、私に質問しに来てください」と生徒たちに告げた。しかし、結局ヒントを与えても分からないし、正解を出すためにはさらに時間を要したので、答を言ってやり、生徒はその答を板書するという授業となってしまった。これはまずい。このままだと、いずれ授業は崩壊してしまうと思った。

そんなときに、山田先生から本をいただいたのだった。大学の授業ではあるが、英語を苦手とする学生たちを相手にした山田先生の授業の様子やプリントを見たとき、何か救世主に出会ったような気がして、自分の中に何かが閃いた。

英作文については、単語一語一語がバラバラになっているものを並べ替えさせるのではなく、もう少し大きなセンスグループの語句を与えて並べ替えさせ、英語の語順の幹を理解させるプリントがその本の中には紹介されていて、私はそのプリントを見よう見まねで作って授業に使わせてもらった。なお、ここでは英作文の授業については本題ではないのでこれ以上述べないが、そのプリントの作成についての詳細は「寺島メソッド同好会」のHPで読むことができる。

<http://kigouken.jimdo.com/> の中の「往復書簡 (岩間龍男・山田昇司)「英作文プリント」の作り方」

音読については、私は「達人セミナー」のワークショップなどにも参加して、様々な音読のバリエーションを知る機会があった。岐阜では、岐阜大学の巽徹先生が、達人セミナーで精力的に活動しておられ、岐阜県教育委員会主催の様々な英語教育に関わる催し物に招かれている。余談になるが、このワークショップに参加した時に、現在の私の勤務校の校長先生や別の学校の私の息子の担任の先生と偶然にお会いした。

現在の私の授業で「達人セミナー」で紹介された音読方法で取り入れさせてもらっているのは、「サイト・トランスレーション」で左側にセンスグループごとの英語、右側にその日本語訳の載っているプリントを使って、ペアで一人の生徒が英語を読み、もう一人の生徒が日本語訳を言うという音読の仕方だ。「コミュニケーション英語」の時間に、本文を一通り終わった後での、復習の音読練習で使っている。生徒全員を起立させ、終了したペアから座っていくというパターンで行ってきた。これはかなり今まで長く使ってきた音読練習の方法でわりとうまくいっていたので

あるが、ここ2、3年ちょっとうまくいかなくなってきた。その音読の活動をしている時に、全くやらないペアが出てきたり、やったふりをして私語をしているペアが出てくるようになった。また、そのプリントの場合、カナ振りがしてない白文なので、読めないというペアもある。この読み方では、本当は相手の英語を聞いて、その訳をプリントを見ずに言ってほしいのだが、実際はただ日本語訳を読んでいるだけというのがその実態だ。さらには、この活動をする時に **Stand up** と指示しても、ぐずぐずとしてなかなか立ちあがらないペアも出てきた。ある時は、その起立の指示を全く無視して「なんで立たなければいけないのか。面倒くせー」と言って H 君という生徒は立ちあがらずペア活動をしないので、私と押し問答になった。あまりにも態度が悪かったので、私は腹を立てて生徒指導室まで彼を連れて行こうとしたこともあった。授業の初めの起立と礼をするにも時間がかかるこの B クラスの実態からして、このような現象が起きるのは当然のことではあった。

あるいは、この音読練習をした授業の後に、あるまじめな女生徒 B さんが私のところに来て、「音読のペアを変えてもらえませんか。あの Y 君は全くやってくれないし、私は怖くて彼を注意することもできません。このままでは、授業で指示されていることができません。私は学校に勉強に来ているのです。だから、ペアを変えて下さい」と訴えてきた。私は次の時間は彼女の注文に答える形で、横の生徒でペアを作るのではなく、前後の生徒でペアを作らせて音読練習をさせた。しかし、Y 君と誰かがペアにならなければいけないのだから、根本的な解決にはならなかった。

後に行う「リズムよみ」のグループ音読では、席を移動して好きな者どうして組ませるやり方なので、そういう点でも生徒たちのストレス、そして教師である私のストレスもほとんどなくなったことを、ここではとりあえず述べておきたい。

また、「達人セミナー」のワークショップで知った音読方法は、生徒の目先を変え気分転換を図るには面白い音読方法がいろいろあったという印象で、私の認識不足や勉強不足もあるのだろうが、その音読方法で生徒に何を学ばせるのか今ひとつよく分からなかった。だから、どんな音読方法があったのか、今思い出そうとしても思い出せない。山田先生の本を読んで大きな刺激を受けていた私は、そこで、再度「リズムよみ」を使ってみようと思い立った。「リズムよみ」の場合、リズムの等時性を持つ英語の強弱リズム、音の連結や脱落などの音の化学変化の英音法の幹を学ばせる明確な目的があるから、使ってみようという気になった。

「英語表現」の例文は、「コミュニケーション英語」の英文に比べると、短い文が多く、リズム記号を付けるのはそれほど困難なことではなかった。「リズムよみ」プリントを用意して、全体で音読練習をした。そして、山田先生の『英語教育が甦えるとき』の中で記述されていた「リズムよみ」グループテストをやってみた。そうすると、生徒たちはかなり楽しそうにやってくれたので、これはいけるかもと思った。B クラスの Y 君は、他の友だちから聞いたのか、私に話しかけてきた。「先生、最近、面白い授業方法を見つけたみたいだね。リズムよみとかいうやつ」普段、全く授業にしっかり取り組めていない Y 君が、まるで教育委員会の指導主事のように私にそんなことを言ってきた。「英語表現」の授業で始めた「リズムよみ」のことが、教室の外でも話題とされていたようである。

先ほど登場した H 君と、この Y 君は、後に述べるマララ演説の2年生の授業報告の中で、何度も登場することになる。

(6) 校長先生からのアドバイス

そのようなとき、確か11月の下旬に、校長先生から英語科職員への問いかけがあった。「英語科の職員はどのように英語を指導しているのか。どのように授業改善をしようとしているのか。特に、2年生と3年生が何をやっているのか全く見えてこない。2年生の担当者代表と3年生の担当者代表は校長室に来てほしい。」と。平たく言えば、生徒をしっかり指導しているように見えないので、懇談の機会を持ちたいということであったと思う。重い心を引きずりながら、私は2年生の代表者として校長先生とお話をさせていただいた。校長先生が言われたのは、「本校の生徒に少しでも力を付けさせるためには、何をすべきか考えてほしい」ということであった。さらに細部までいくと、「本校生徒を考えると、あれもこれもすべてやろうとするのは苦しいのではないのか。レッスンごとに指導の重点を変えるなど、メリハリのある授業にしたほうがいいのではないか」ということであった。もっと具体的に言うと、「たとえば、この場面では徹底的に音読をす

るとか、たまには歌を教材にして生徒の気分を変えてやるとかの工夫が必要ではないのか」とも言われた。これを聞いたとき、私もその通りだと思った。さらに校長先生は私に「先生は、長年英語の教師をやっけてられて、色々な指導方法を知っておられると思うので、2年生担当者をぐいぐいと引っばっていってもらえないか。先生がこうやりましようと言え、他の担当者はきつとついてくると思う」と言われたので、「主旨はよく分かりました。他の先生方と相談して進めます。」と言って校長室を辞した。

以上の校長先生との話し合いの様子を学年担当者に報告して、いくつかのことに実施することを決めた。本題とは少しずれるが、まず補習参加者の人数が少なすぎるという指摘を受けていたので、冬休みに2日間だけ特別の補習をすること、冬休み明けにも模試対策の特別な講座を開設すること、英検の問題か入試問題を授業中にやらせること、チャレンジプリントを作成し廊下に設置して生徒に持っていかせることなどを、2年生担当で決めた。そして、授業そのものについては校長先生が音読のことを述べてみえたので、私が個人レベルで始めていた「リズムよみ」を学年全体でやってみることを提案して、承諾を受けた。

私は自分がしゃしゃり出て、学年を引っ張っていくのは、何か僭越な感じを持っていた。かつて別の学校でのことであるが、学年にやり手の先生がおみえになり、その先生が次々と提案をされて、かなり細部まで統一された授業をしたことがある。ところが、私はその先生が提案される方法に必ずしも賛成ではなかったもので、すごくつらい思いをした経験がある。自分の腹に落ちていない授業方法で授業をやると、生徒との軋轢が生まれたときに、自分も生徒の意見と同じ気持ちなのに、それと正反対の行動を取らなければならなかったのである。それでは生徒とうまくいくはずがなかった。これは授業だけでなく、生徒指導をするときにも出てくる現象である。そんなことから、自分がイニシアティブを握って、学年を引っ張っていくのは、一歩間違えと他教師を引き回すことになりかねないという危惧を持っていた。

その一方で、学年で足並みをそろえて何かをしたいという相反する気持ちがあった。そんな時に先ほどの校長先生からの提案があったので、その提案を大義名分として使わせてもらって、「リズムよみ」を学年統一でやってみようと思ったのだ。いわば、迷いを持っていた私の肩を結果的に校長先生の提案が押して下さったと言える。校長先生とのこのやりとりがなかったら、今回の学年全体での音読の授業の取り組みは、実現していなかっただろう。

第二部 教科書の「リズムよみ」はどのように行われたのか

(1) 教科書の「リズムよみ」音読テストはどのように行われたのか

2年生全体でリズムよみをしてみようということになり、12月下旬から1月上旬には第7課 Part 1、2月上旬には第8課 Part 2の「リズムよみ」音読テストをそれぞれ2時間ずつ実施した。いずれもすでに一通り授業でやったところの、復習として、この音読テストを行った。

この音読テストの授業は次のような手順で行った。

- ①クラス全体で教師について、「リズムよみ」プリント（註）を見て、ペンを等間隔でたたきながら、英文の強の音とペンを打つ音を一致させた「リズムよみ」の一斉練習をする。
- ②2名から4名のグループを作らせ、それぞれのグループがペンをたたきながら声を出して「リズムよみ」の練習をする。
- ③グループごとに教卓のところに来て、「リズムよみ」音読テストを受け、担当教師が合否を決める。
- ④合格したグループは、事前に用意してある視写プリント（第7課と第8課すべてのパートのフレーズ訳が示され、英語を書く欄が作ってあるプリント）に取り組む。

そして、この音読テストは1回分のテストに合格したら各2点、視写プリント1枚の提出につき各1点の平常点を与えることを生徒に事前に明示してあった。例えば第7課であれば、音読テスト2点×2＝4点、視写プリント1点×4＝4点で、合計8点の平常点がもらえることになる。（さらに余裕のある生徒は視写プリントを二回り目もやっていいことになっていた。）

この音読テストの授業については、「リズムよみ」のやり方をご存知なかった先生には、私の授業のグループ音読テストの様子を事前に参観してもらい、これからやろうとしていた授業のイメージを持ってもらった。この授業を学年でやることを提案したのは、私だったので、実際に授業をしたらどのようなことになるのかとても不安だった。ところが、12月下旬から1月上旬に、はじめてこの授業を実施した後の、担当者お二人の先生方のこの授業方法に対する評価はとても高かった。安心すると同時に本当に嬉しかった。具体的にその先生方は次のようなことを言われた。

- ・普段、すぐに居眠りしてしまったり、授業に参加できない生徒が積極的に音読練習に挑戦していたのが印象的だった。
- ・音読テストに合格すると、「やった！」と言って喜んでくれる。
- ・音読テストに合格するグループが増えていくと、視写プリントに取り組む生徒が増え、教室の中が活気のある喧騒の状態から静寂の状態に変わっていくのが心地よかった。
- ・視写プリントのように、生徒がやるべきことがはっきりしているので、生徒は取り組みやすい。
- ・生徒たちは点数に敏感で、音読テストそして視写プリントの取り組みに異様に燃える。

この音読テストの授業には、私も他のお二人の先生と同じような印象を持った。平常点を明示して外的動機づけを与えてあることも、教師の助けとなる授業テクニックであると感じている。この授業の前の段階でも、私は「リズムよみ」音読グループテストをしていたことがある。しかし、平常点には入れていなかったの、生徒たちの取り組みが今ひとつで緊張感がなかった。そんなことから学年統一で行えば、平常点にしっかり組み込むことができるので、ありがたいことだと思っていた。

この学年担当の一人の先生から、「生徒が視写プリントを家でやってきてもいいかと聞くのですが、持ち帰らしてもよろしいか」と聞かれたので、「もちろんいいんじゃないですか」と私は答えた。このやりとりも面白いやりとりだなと思った。通常は、教師が宿題を出してやってこさせるのだが、この場合は生徒が家でやらせて下さいと要求しているからだ。

また、冒頭の「普段、居眠りをしてしまったりする生徒が、積極的に授業に参加したのが印象的だった」という話があるが、私もこの授業の中で全く同じ経験をした。Bクラスでは、いつも私語と居眠りを注意しなければならない困り者の生徒が何名かいる。そのうちの特に際立った二人の男子生徒が、この音読テストでは一生懸命練習をして、1番に受けに来て合格したのには驚いた。このような光景は、クラス全体にも前向きな影響を与えたようにみえた。彼らは元気がありすぎて、通常の授業では眠くなってしまうか、私語せずにはいられないようだ。ところがこの授業は、ペンをたたき声を張り上げる、いわゆる身体を使う授業なので、彼らの行動パターンに合っているのかもしれないと思った。ただし、残念なことだが、通常の授業にもどると、この二人は再び元の木阿弥に戻ってしまい、授業中での私とのバトルが再開される。「口を閉じなさい」と、私は声を張り上げ、生徒との闘いは続く。

(註) この教科書の「リズムよみ」プリントは、リズム記号やカナ振りを手書きで作成したので、ファイルとしてここに載せることはできなかった。教科書の「リズムよみ」プリントは、p.38に掲載したFile Aのマララ演説の「リズムよみ」プリントと同じようなものである。この教科書の「リズムよみ」プリントには、その使い方として次のような注意書きを載せていた。これは、『英語にとって音声とは何か』(寺島隆吉著・あすなろ社)から、私なりにまとめたものである。

「リズムよみ」プリントの使い方と英語音声の原則

- ①大きな□と○は強く読む。小さな・は弱く読む。
- ②強く読まれる部分は時間的にほぼ同じ時間で読まれなければならない。(リズムの等時性)
- ③□は内容語、○は機能語を表す。一般に内容語は強く、機能語は弱く読まれる。
内容語とは、意味の上で重要と考えられる語であり、名詞・指示代名詞・形容詞・本動詞・副詞・疑問詞をさす。機能語は、人称代名詞・関係代名詞・冠詞・助動詞および be 動詞・have 動詞・前置詞・接続詞をさす。
- ④文全体のリズム(文強勢)が個々の語のアクセント(語強勢)より優先する。特に強勢のある音節が続いて出てくるのを避ける傾向がある。(したがって、内容語が強く、機能語が弱くという原則が崩れることもある。)

また、『英語にとって音声とは何か』の p. 12 ~ p. 15 の「第1章第2節 英語リズムの基本構造、第1章第3節 リズムの何を教え学ぶのか」の記事もコピーして裏面に掲載した。これは、ひとつは生徒から「なんでこんな「リズムよみ」をしなければならないのか」という疑問に対処するため、もうひとつは学年担当教師にも目を通してもらって、「リズムよみ」の有効性と意義を理解してもらうためであった。

「リズムよみ」プリントの作成は、かなり手間がかかる。「強にすべきか弱にすべきか」迷うこともしばしばである。単純に上記の英語音声の原則以外に、授業でそのプリントを使って生徒が読めるかどうかというのも、実践上突き当たる問題である。

(2) オリジナル作文に出てきた衝撃的な生徒の本音

私が個人レベルで「リズムよみ」をしていたときや、学年統一で「リズムよみ」を始めたころの様子を、私は以下のように山田先生にメールで報告していた。

山田先生

電話で、疑問詞の **who, whose, where, when, which** の意味も覚えられていない生徒 A さんのこととお話しました。彼女は何科目も欠点があって、欠点科目がたくさんある生徒は学校では反省文を原稿用紙に何枚か書かねばならないという決まりが、勤務校にあります。彼女の反省文を読んではいけないのですが、担任の先生が次のようなことを言っていました。彼女は「学校や先生は私の敵だ。私に非はない。」ということが書いていたそうです。担任の先生は、これが反省文と言えるのかと嘆いておられました。

リズムよみのグループテストを学年統一で始めたということをお話しました。リズムよみを全く知らない先生に、私の授業でのリズムよみグループテストの様子を1回だけ見てもらって、リズムよみグループテストの授業をしてもらいました。上記の A さんについて、私は英語表現の授業でグループテストをやった時、A さんは仲良しのもう一人の女子生徒とペアを組んだのですが、私の授業の時は音読テストは受けに来ず不合格となっていました。私はリズムよみを全くご存知でなかったその先生に、A さんを合格させることはできましたかと聞いたら、音読テストをしたら一番最後にグループ音読テストをその A さんを含む3人の生徒が受けにきて合格したと聞きました。別のクラスでも普段授業では寝てばかりいる極端に低学力の生徒も、グループテストでは合格をしたと言っておられました。その先生はあんな意欲と学力のない生徒たちが、一生懸命リズムよみ練習をしていたことに感激しておられました。そんなことを聞くにつけ、やはりこのグループ音読テストの実践方法は、素晴らしいと実感しました。

この生徒 A さんについては、もうひとつ面白いエピソードがあります。私は彼女を英語表現の時間に教えています。この授業は、文法英作文のような内容です。時間がある時には、その日に習った表現を使って、生徒にオリジナル文を作らせ、生徒に相互評価をさせ、最後にクラス全体にそのオリジナル文を発表させることをやっています。オリジナル文を作らせる時は、机間巡視をして生徒のオリジナル作文を時間の許す限り訂正して直してやることをしていました。

Whenever を使ったオリジナル文作成の時のことです。A さんのオリジナル文を見てやって訂正しようとしたら、A さんは「見せない」と言いました。私は「どうしてなの？訂正したいのだけれど」と言いました。そうしたら A さんはオリジナル文を書いていたプリントを持って、背中の後ろに隠してしまいました。

そのオリジナル作文は授業の最後にいつも集めていましたので、どうして A さんはその作文を見せてくれなかったのかと思い、彼女のオリジナル作文を見てみました。まちがいだらけの英文でしたが、私なりにその作文を添削すると次のような英文でした。**Whenever I see Mr. Iwama in English class, I feel uncomfortable.** これを見た時、私は苦笑いしてしまいました。彼女にとってはやはり教師は敵なのだと思います。

このことを、職員室の M 先生や担任の先生に話したら、まずは大笑いでした。そして、こんな学力がない子でも **uncomfortable** という単語は絶対に知らないのに、辞書で調べて書いていると

ころが素晴らしいじゃないですか。ちゃんと授業に参加しているじゃないですかと言われ、なるほどそういう見方もあるのかと思いました。また、Aさんが私のそのオリジナル作文を見せることを頑なに拒否した理由も分かりました。Aさんの信じられない様々な言動・発言について、職員室では「Aさん語録」を作ると面白いかもと言われていています。そんな彼女がリズムよみ音読テストができたというのは、感激でした。

2014年12月23日 岩間

上記のメールに対して、以下の返信が返ってきた。

拝復 岩間先生

お便りありがとうございました。リズムよみ実践もさることながら、Aさんのエピソードはとても印象的です。自分自身の本心を英語で言わせた、という点は拙著『甦るとき』でもふれた亀谷実践の中に出てくる女の子とは対照的です。というのは、この女子生徒は亀谷クラスの中で「別人のようになれた」と語っているのですが、Aさんは自分自身でありつづけているわけですから。

(後略)

2014年12月24日 山田

もうひとつ別の男子生徒が書いた印象的なオリジナル作文がある。「比較」のLessonが終わった後に書かせた英文である。Mr. H is one of the greatest teachers at our school. なんの変哲もないオリジナル作文である。しかし、私はこの英文を見たとき、うーんと唸り声を上げた。

H先生はこの男子生徒の担任で、今年定年退職になる先生だ。職員室で私の隣の席に座ってみえた。退職の年に担任希望を出されて担任をもってみえた。私などは退職の年は、担任を持つのは、もうきついと思っ希望しなかったことを考えると、それだけでもH先生はgreat teacherである。さらに、かつてこの学校ではとてもワンマンな校長先生がみえて「暗黒の時代」とささやかれていた時代があった。単にワンマンだけならいいが、職員に対する陰湿な振る舞いもあり、職員は恐怖におののき、ほとんど誰ひとりとしてモノが言えず、自分の身を守るだけで精いっぱい時期があった。そのような時期にあっても、このH先生は職員会議などで堂々と正論を校長先生に対しても発言されていた。もちろん、その後には信じられない嫌がらせを受けたのは言うまでもない。

そんな姿を私は見てきていたので、この生徒の英作文に大きなリアリティを感じた。またこのH先生は運動部の部活動にも熱心な熱血教師でもあった。文字通り、one of the greatest teachersであった。生徒が今述べたことを知っていてこのような英文を書いたとは思えないが、その事実を知らなくても、one of the best teachersではなく、one of the greatest teachersということ、クラスで日常に接していて敏感に感じ取っていたのではないかと私は想像している。H先生に「先生のクラスの生徒がこんな英文を書いていた」と紹介したら、にこりとされて「そんないいこと書いてくれても、何も出ませんよ」と言っておられた。

このH先生は国語の先生で、ある日その担任クラスの授業から帰ってきて、次のようなことを言っておられた。「漢字テストをやると、いつも合格者が2～3割しかいないのに、今日はほとんどの生徒が合格だった。どうしたんだと生徒に聞いたら、生徒たちは今日は私の60歳の誕生日なので、先生へのプレゼントだと言ってくれた」と。つまり、今日は担任の先生の誕生日なので、みんなで示し合わせて漢字の勉強を一生懸命やってきたということだった。

なんという、かわいい生徒たちだと、私も本当に感激してしまった。普段は生徒と接していると、むかつ腹が立つことが多いのだが、この日ばかりは私も心がホクホクと温かくなってとても幸せな1日を過ごせた。このクラスでは帰りのSHRにプレゼントをH先生にわたしたということも後から聞いた。この先生は、前任校は市内の有数の進学校であったが、このような出来事は前任校ではあり得ない、本校の生徒は前任校の生徒に比べると勉強はできないかもしれない

が、親しみという点で見どころがあると言っておられた。教師冥利に尽きる出来事であった。これで Happy End にしたいのだが、翌日からは再び H 先生にはクラスの生徒との闘いが待っていた。

これが、本校の one of the greatest teachers の顛末である。

(3) 個人レベルでの実践から学年レベルの実践へ

また、次のような報告も山田先生にメールしている。

山田先生

(前略)

2年生の英語授業は「コミュニケーション英語Ⅱ」が4単位「英語表現」が2単位(2クラス3分割の授業)あります。私の担当する「英語表現」のあるクラスで、生徒たちが全くコーラスリーディングで声を出さなくなってしまうのが事の発端で、リズムよみを取り入れてみました。最初、私個人が「英語表現」の時間にリズムよみをしていました。学年統一ではないので、平常点に加点することもできない状況で、本当にただリズムよみをしていただけでした。グループでのテストもやったりしていましたが、平常点に入らないので、どこか緊張感がありませんでした。

このリズムよみも何回もやるうちに、授業の時にリズム記号のついたプリントを持っていくと生徒は「出た!」とか「えー、またこの読み方でやるの?もういい!!」といった肯定的でない反応が現れるようになりました。こんな反応を見るにつけ、やはり平常点に加点して、緊張感をもってやらせる必要を感じていました。リズムよみをした最初は、生徒たちは面白がってやっていたのですが、そのうちにクラス全体で読む時は、ペンは打っているのですが、声を出さない状況とか、落ち着きの無い生徒はわざとペンの打ち方をめちゃくちゃにして、いわばリズムよみを面白半分妨害する生徒もいました。

英語表現で、学年8クラス中、私がなんらかの授業で関わっていたクラスは生徒全員ではないにしても7クラスあり、その生徒たちは事前にリズムよみを経験していました。今度は「コミュニケーション英語Ⅱ」で学年全体でリズムよみ音読テストをやる予定だと、あるクラスで言ったら、ある女生徒が「誰がそんなばかなこと言いたしたんだ?」と何度もしつこく聞くので、私は「学年担当で話し合って決めた」と遠慮がちに私への責任追及が及ばないように言いました。そうしたら、彼女は「どうせ先生がそんなこと言いたしたんでしょう」しようがないなあ、といった様子でした。

そして、今度は平常点に加点して「コミュニケーション英語Ⅱ」で学年統一でやることにしました。学年統一でやるというのは、私としてはありがたい半面、もしうまくいかなかったら、次の時に別のことで学年で統一してやろうとした時に、学年担当教師の間に拒絶反応が出る可能性があったので、うまくいくのかとても心配でした。実際のところ、私自身が授業の中で上記のような苦勞をしていましたので。

学年は私を含め3人で「コミュニケーション英語Ⅱ」を担当していました。リズムよみはM先生は経験があるとのことでしたが、もう一人の先生はやったことがないとのことで、私は特に心配していました。その先生のことは、前回もメールでお話ししましたように、思いのほか順調にAさんの指導も含めてうまくいったということでした。その先生はそのリズムよみの授業をやってみて次のようなことを言うておられました。

すでに「英語表現」で岩間先生がリズムよみを先行してやってみえたので、クラスの中にその読み方を知っている生徒が3分の1から3分の2ぐらいいて、その子たちがクラスの中でリズムよみのリードをしてくれました。教師である私よりうまくリズムよみしていました。だから、授業がスムーズに行き、やりやすかったです、とのことでした。このことはM先生も同様のことを言うておられました。

「ええ、またこの読み方、もうこの読み方はうんざり！」というようなことを言っていた生徒たちが、違う担当教師が別の科目でリズムよみの授業をしたら、この読み方を知らない生徒やさらには担当教師に対してまでも、知ったかぶりをして、率先してクラスをリードしていったという話を聞いた時には、彼ら彼女らの得意げな様子がありありと目に浮かんで来て、なんだか可笑しくて嬉しくなりました。

2014年12月29日 岩間

第三部 マララ演説音読授業の試行実践（3年生での授業）

（1）マララのノーベル賞受賞演説との出会い

山田先生から『英語教育が甦えるとき』を頂いてから、この本についての感想や疑問点を私が述べるのがきっかけとなって、2014年12月の暮れから、私は再び一時期遠ざかっていた「国際教育総合文化研究所」（旧「記号研」）の準研究員となり、その研究所のML「研究仲間」に参加することとなった。そのMLで、山田先生の「マララさんのノーベル受賞演説をめぐって考えたこと」という記事が目にとまった。以下にその一部を引用する。

マララさんのノーベル受賞演説をめぐって考えたこと

私はノーベル平和賞については以前から疑問を持っていたので、マララさんが受賞したというニュースを聞いたときも取り立てて何も感じなかった。むしろ候補に上っていたエドワード・スノーデンや日本の憲法9条を広める活動をしている市民グループが受賞しなかったことに対する失望と、同時に「やっぱり米国に都合の悪いものは選ばれないな」と納得する気持ちを持っただけだった。

しかし、アジア記者クラブ通信（2014年11月号）の記事を読んで私の考えは変わった。以下の文はその記事を紹介した通信編集部の一文である。

パキスタンでは青年層を中心にマルクス主義への共感と社会主義運動が急速に高揚している。西側メディアがこれを積極的に報じることは決してない。ましてや2014年のノーベル平和賞を受賞した17歳のパキスタン女性、マララ・ユスフザイがマルクス主義を「抑圧からの解放の真の武器」とみなし、支持層を拡大するパキスタン労働党の今年の党大会に熱烈なメッセージを送ったことをほとんどタブー扱いしている。筆者は既存メディアがマララの受賞理由を「教育こそ唯一の解決手段」との訴えに矮小化しており、パキスタン人ヒロインの実像の黙殺に抗議する。（後略）

Ben Norton, *Predictable Corporate Media :The (Socialist) Malala Yousafzai the US Media Doesn't Quote* 「予想どおりの企業メディア：米国メディアが伝えない（社会主義者）マララ・ユスフザイ」

<http://www.counterpunch.org/2014/10/15/the-socialist-malala-yousafzai-the-us-media-doesnt-quote/>

私は「マララの実像」について知りたくなって、彼女の自伝を読んだり彼女の演説を聞いてみた。彼女の自伝の中で印象に残った話はいくつもあるが、ひとつ挙げるとすると、マララがゴミの山からお金になるモノを拾い集めていた少女を見て、父親に彼が経営する学校に入れてやってくれと頼む話がある。父親は少女がその仕事をやめると彼女の家族が生活できなくなるから学校に入れてやれないと話すのであるが、これは文盲の根源には貧困があることを教えるエピソードである。

もうひとつ、この話も紹介する。これは訳書（2013年版）ではなく2014年版の原書の方に載

っていた話であるが、マララは国連演説の後にホワイトハウスに招待される。彼女は「自分が言いたいことを全部しゃべれるなら」という条件でその招待に応じ、オバマに「無人機攻撃はやめてほしい。新たなテロリストを生むだけだ」と訴えた。

(後略)

この記事を読んだとき、ハワード・ジンの『肉声でつづる民衆のアメリカ史 上巻』(2012 明石書店)の中のヘレン・ケラーについての記述を思い出した。ヘレン・ケラーは、見えない、聞こえない、話せないという3重苦を持ちながらも、多くの不幸な人々に勇気を与えた偉人として、通常は描かれてきている。しかし、歴史学者ハワード・ジンによれば、ヘレン・ケラーは社会主義者であり、第1次世界大戦のとき、戦争に強く反対した反戦運動家であったと紹介されていて、私はその事実に強い衝撃を受けた。上記のマララについての記事にも、ヘレン・ケラーの時と同じような大きな衝撃を受けた。さっそく、山田先生が紹介していたYouTubeのマララのノーベル賞受賞演説を視聴した。そして、その演説を聞いて、感動のあまり私は涙を止めることができなかった。この演説をぜひ授業の教材として取り組みたいという強い衝動にかられた。さっそく冬休み明けに、その授業をする機会を作ることができた。以下は、その授業実践の報告である。

(2) 実施クラスについて

3年生の英語Ⅱの授業は、数学と抱き合わせの選択科目で、生徒数がわずかに11名の授業クラスだった。冬休み明けすぐに、3年生はすでに学年末考査も終わってしまったので、いわば進度を気にせず授業ができる条件があった。この授業の選択者は、いわゆる私文系の生徒たちであるが、すでに全員進学先が推薦で決まっていたようであった。この授業では入試問題の問題集をやっていたのだが、11月あたりからきわだって授業に対する関心が薄れ、無気力な状態にあり、授業の低迷が続いていた。そんなこともあって、あと3時間しか残されていなかった授業では、テキストを離れ、マララのノーベル賞受賞演説の以下の部分を教材として取り組むことにした。

(授業で取り組んだ演説部分)

マララのノーベル賞受賞演説 (最後の部分)

(A)

Dear sisters and brothers, the so-called world of adults may understand it, but we children don't. Why is it that countries which we call "strong" are so powerful in creating wars but are so weak in bringing peace? Why is it that giving guns is so easy but giving books is so hard? Why is it, why is it that making tanks is so easy, but building schools is so hard?

(B)

We are living in the modern age and we believe that nothing is impossible. We have reached the moon 45 years ago and maybe will soon land on Mars. Then, in this 21st century, we must be able to give every child quality education.

(全員)

Dear sisters and brothers, dear fellow children, we must work... not wait. Not just the politicians and the world leaders, we all need to contribute. Me. You. We. It is our duty.

(A)

Let us become the first generation to decide to be the last, let us become the first generation that decides to be the last that sees empty classrooms, lost childhoods, and wasted potentials.

(B)

Let this be the last time that a girl or a boy spends their childhood in a factory.

Let this be the last time that a girl is forced into early child marriage.

Let this be the last time that a child loses life in war.

Let this be the last time that we see a child out of school.

(全員)

Let this end with us.

Let's begin this ending ... together ... today ... right here, right now. Let's begin this ending now.

Thank you so much.

(3) 授業の概要

3時間の授業は以下の手順で行った。この授業では家庭学習は要求せず、授業時間内で学習させることとした。

1 時間目

- ①マララの演説の英文(資料のプリントの部分の英文)のテープリスニングとコーラス・リーディング。
- ②マララについての来歴や銃撃のあらましを述べたプリント(ウィキペディアから取った資料)を読む。
- ③フレーズ訳のできる読解プリントに取り組みさせる。

2 時間目

- ①マララの受賞演説全部のDVD映像(日本語字幕)を視聴する。(27分)
- ②読解プリントの続きを取り組みさせる。
- ③読解プリントを終了した者には、フレーズごとの視写プリントを取り組みさせる。

3 時間目

- ①プリント部分のみ、今度は英語の字幕でDVDを視聴させ、マララが言うと同時にその字幕を読むことを指示した。
- ②全体でのコーラス・リーディングでの音読練習。
- ③グループ内での個別の音読練習。
- ④教師によるグループ音読の「みきわめテスト」
- ⑤前に出たグループごとの音読発表
- ⑥再度、音読部分のDVD(日本語字幕)の視聴

- 作成したプリント
- ①マララの来歴の資料、授業で使う演説部分の英文(1枚)
 - ②フレーズ訳読解プリント(2枚)
 - ③フレーズごとに日本語訳を書いた英文視写プリント(1枚)
 - ④マララの受賞演説の全文訳のプリント(1枚)
 - ⑤リズム記号とカナ振りをした音読プリント(1枚)

(4) 1時間目の授業

1時間目の段階では、DVDを入手しておらず、音声は家でyou tubeで再生したものを直接マイクで録音したものを使った。これを聞かせて、コーラス・リーディングをした。資料も慌てて用意したので、ウィキペディアのものを使わせてもらった。私が読み上げた資料は裏表の分量で少し長かったので、前半まで読んで、後半は次の時間に読むことにしようかと生徒に聞いたら全部今読みたいと言ったので、最後まで読むこととなった。マララは自分たちより一つ年下の女の子のことなので、結構強い関心を持ったようだった。その後は、資料の英文のフレーズ訳読解プリントに取り組みさせた。2枚のプリントだった。この時間内に1枚目のプリントは、ほとんどの生徒が終わり2枚目を取り組んでいる途中で鐘が鳴った。

ひとりの男子生徒は2枚目も終えていた。普段使用していた入試問題の長文に比べると、この演説のプリントのほうが簡単だった。入試問題の長文のほうが難解でつまらない内容であるのに対し、マララの演説のほうが簡単であるにもかかわらず内容が深くて心を動かす英文であったので、授業に取り上げて良かったと思った。

(5) 2時間目の授業

2時間目の段階では、幸いにも新英研のホームページから、マララのノーベル賞受賞演説と国

連での演説の DVD をぎりぎり前日の日曜日までに取り寄せることができた。そこで、受賞演説 27 分すべてを日本語字幕で生徒に視聴させた。この全文を知って初めて、授業で取り上げている最後のクライマックスの演説部分も理解が容易になったと思ったからだ。残念なことに 11 名中 2 名の生徒が、うつつらうつつらしていたが、他の生徒たちは興味深げに食い入るように DVD を見ていた。DVD が終わったとき、「17 歳なのに、すごいね！」という声が聞こえてきた。「Why is it? Why is it?」とマララのジェスチャーを真似しながら、声を上げている生徒がいた。さらには同じ生徒が、「Why is it that countries which we call strong...」と読み始めた。また次の一節も印象的だったようで、「Let us become the first generation」と何度も繰り返している。これはキング牧師の I Have A Dream の最後の部分の Let freedom ring を繰り返す台詞を彷彿とさせる台詞だ。演説の中で繰り返し出てくるフレーズが、生徒にもとても印象的だったようだ。またこの演説では、strong 対 weak, hard 対 easy, the first 対 the last, begin 対 ending, countries which we call strong are so powerful in creating wars but are so weak in bringing peace といった、単語と単語、文と文の対比が巧みで素晴らしい。だから生徒は、DVD が終わった途端に、マララの振りを交えながら、英語の台詞を言いだしたのだと想像される。この情景を目の当たりにして、やはりこの演説は音読教材としてとてもすぐれているとの強い印象を受けた。マララの演説の全文の日本語訳を生徒に配布し、読解プリントの答え合わせは省略をして、3 時間目は音読だけの授業にしようと決めていた。

(6) 3 時間目の授業

音読の授業については、山田昇司先生の『英語教育が甦えるとき』(明石書店)の p. 260-p. 266 の実践を参考にしてみようと思っていた。また、山田先生の前著『授業は発見だ』の中の群読について述べた部分(p. 48-p. 50 や p. 177-p. 181)も読み直してみた。

『英語教育が甦えるとき』では「対話群読」という音読実践について述べられている。「群読」は「リズムよみ」の次の段階にくる「表現読み」の一種であるとのことだ。この「群読」は、「個人プレゼン」に比べると、複数の生徒で音読するので生徒に負荷が少ないことが想像され実践がやりやすそうなので、取り組んでみたい読み方であった。例によって、この「群読」を使った授業を自分がすると想定して、ご迷惑も顧みず、p. 260-p. 266 の部分について電話で質問させていただいた。

(質問 1)

p. 262 に「群読」のシナリオが示されている。A, B, A&B の区別がプリントの中にあった。私はこれは A と B の二人の学生が対話音読をするのだと思っていた、そのことを山田先生にお聞きしたところ、A は 2～3 名の学生、B も 2～3 名の学生で、5～6 名のグループで文字通り「群読」するとのことであった。また、このプリントは例であって、シナリオはオリジナルのものを学生に考えさせたのかとお聞きしたところ、学生に考えさせると楽をするシナリオを考えてしまうので、このシナリオで「群読」させたとのことであった。私はこの話を聞いて、同じようなマララ演説の「群読」音読プリント(本稿の冒頭にあるプリントに仮名振りとリズム記号を付けたプリント)を作成し、クラスの 11 名の生徒を A と B の 2 グループに分けて音読させることにした。

(質問 2)

教師の前でみきわめテストをしたとの記述がある。その後、クラスの前でグループによるプレゼンをさせたのか、またその時にプレゼンを見ている学生たちには、他者評価の用紙を渡して評価の活動を入れたのかと質問をした。これについては、クラスの前で当然プレゼンをしたとのこと。しかし、ここでは他者評価はせず、プレゼンが終わった時に聴衆は拍手をただけであったとのことであった。私が他者評価を気にしたのは、自分のグループ発表が終わると安心してしまっ、私語や他事をする生徒が出てくるといけないので、他者評価をやらせて、他グループの発表を見ている時も、なんらかの活動があったほうがいいのではないのかと思ったからであった。しかし、私のクラスの場合、わずか 2 グループだけで、他グループのプレゼンを聴くのは、わずか 1 回だけなので、私語とか他事は心配する必要はないのではないかとのことになり、他者評価の用紙は作成しないこととした。

(質問3)

「リズムよみ」と「群読」などの「表現読み」は、同じではない。「リズムよみ」の後に「表現読み」をすると、学生たちはどのような読み方をするのか。この質問については、「表現読み」の段階でも「リズムよみ」は残っているとのお答えであった。また、学生は「表現読み」をしているつもりでも、なかなかそのようには聞こえないこともよくあるとのことであった。

(授業の様子)

最初に、マララの演説の授業で扱っている箇所 DVD を頭出ししておいて、英語の字幕で視聴させながら、同時に音読をしてみなさいと指示をした。しかし、マララの演説を聞いているとかなりゆっくり話しているように聞こえたが、実際にそのスピードに合わせて読むことはかなり難しく、あまりしっかりと音読できなかった。

今回の私の授業では、リズム記号とカナ振りをした「リズムよみ」プリントを用意をした。しかし、「リズムよみ」から「表現読み」への移行がどのようになされるのか想像がつかなかったこと、このマララの演説の3分程度の英文をすべて「リズムよみ」するのは通常の読み方に比べると結構ハードなこと、「リズムよみ」と実際のスピーチでは読み方が違うのではないかと生徒から指摘されるかもしれないことを考えて、「リズムよみ」はせず、通常のコーラス・リーディングで一斉練習をした。その後、生徒を1班6名、2班5名に分け、グループ練習をさせた。グループ練習の様子を見ていたら、1班は6名全員でやっていたが、2班はAグループとBグループ別々に練習をしていた。その練習のあと、「みきわめテスト」を1班より始めた。そのテストの最中に、2班のAグループの男女3名が私語を始めてしまったのは、残念なことであった。「AB合同で練習しなさい。」と指示しておけば、このようなことは防げたかもしれない。1班については合格として、次に2班にみきわめテストをやってみた。1班に比べ練習量が不足していて、ところどころ間違えて読む所もあったが、時間もなかったので、そこで打ち切った。

「リズムよみ」のグループテストの時は、ペンの音がそろっていること、声のリズムがそろっていることという合格条件があり、合否がつけやすい。生徒たちも自分たちの失敗がすぐに分かるので、教師が「ストップ、ミス1回目」と言っても生徒たちは納得してくれる。ところが、この「群読」あるいは「表現読み」のみきわめテストの合格基準は、明確ではないので合否をつけるのが難しいと感じた。

次に、全体の場で前に出て発表させた。この時に「マララになったつもりで読むこと、できたらどこかで振りを入れること」と指示をした。1班は無難に発表をまとめた。Me You We It is our duty. の台詞の所では、マララと同じように指で自分を指し、次に目の前の You に指をさし、最後に全体 we に指を指す「振り」を付けて「群読」していた。2班の発表では、Bグループの読み方に抑揚がなく日本語のような「のっぺらぼう」の読み方をしていたのが気になった。この時、思ったことは、やはり全体練習の時「リズムよみ」でやっていたら、このような読み方にはならなかったのではないかとということであった。実際のマララの演説を聞いていても、すぐく強弱がはっきりしていて、それを聞きながらリズム記号をつけられるのではと思ったくらいだった。その上、この演説の最後の部分は、繰り返しが多いため、リズムよみをするのに、教科書に出てくる英文より、はるかにリズムよみをしやすい英文であったことを思うと、「リズムよみ」をしなかったことが悔やまれる。2班の生徒が読み終わった時、1班のある生徒が「私たちの班が勝った」と言っていたが、私も同感であった。

授業の最後にもう一度、DVD でこの部分を視聴した。生徒たちは今度は日本語字幕で見たいと言ったので、日本語字幕を見た。DVD が終わった時、「先生、この授業は今日で最後ですか」と聞いてきた。「ああ、最後だね」と答えたら、数名の生徒がマララの最後の台詞を使って私にこう言った。「Thank you so much.」と。おお、マララになりきっているじゃないかと思った。このマララの堂々として澄み切った声の演説を聞いていると、何か自分も英語を話したくなる気持ちにさせるようだ。私はありきたりの返答でこの授業を終えた。「You're welcome.」と。良くも悪くも、この授業は終わった。生徒たちが、高校の時にマララの演説を練習したなあと懐かしく思い出してくれることを心密かに願う。

(7) 授業の後、思ったこと

上記でみてきたように、わずか3時間のこの授業は決してうまくいった授業実践ではない。しかし、入試問題の長文をやっている時に比べると、今回の演説の授業には強い関心を生徒は示したとの手ごたえを感じた。そして、教師自身が感動したものを教えるということの大切さを改めて思い知らされた。すでに進路が決まってしまう生徒を相手に、入試問題の長文の授業をやることの虚しさを感じてきただけに、そのことをなおさらに思う。これまでと違って、この授業がある日がとても楽しみだった。

この授業ではこれ以外に、英語の歌を2曲(カペンターズの We've Only Just Begun と映画「タイタニック」のテーマ曲 My Heart Will Go On (セリーヌ・ディオンの歌) を投げ込み教材としてやったことがあった。この時は「リズムよみ」をしてから歌の練習をしていた。今回、マララの演説のリズムよみ音読プリントを配布した時、生徒は「あ、この読み方、前にやったね。」と言って、その読み方で読もうとした生徒がいた。また、普通に読んでいても記号が大きいところが強く読まれるということを意識しながら読んでいた生徒も見受けられた。そんなことから、繰り返しになるが、この演説もリズムよみからやるべきであった。そして、もし機会があり、このあとに述べる「(9) 教材としてのマララのノーベル賞受賞演説への懸念」が解消できれば、再びやってみたい教材である。

この授業は私ともう一人の先生で担当していた。もし生徒が目を輝かせて授業を受けることができる教材があったら、もっと積極的に取り入れるべきだった。担当者も二人であれば、合意もしやすい。多忙の中に埋もれてスケジュールをこなすことで精一杯の毎日の中、その多忙を口実として、そのようなことができなかつたことを悔やんでいる。

(8) 授業実践の記録をすることについて

山田先生の『英語教育が甦えるとき』で教えられたことが、もうひとつある。それは授業実践を記録することについてだ。この本の p. 39 には新任の時の研究授業の赤茶けた指導案と自分が感じたことのコメントのことが記載されている。もう35年以上前のことであろう。よくそんな記録が手元に残っているものだと感心をした。山田先生はその後、数十年の間ずっと研究会、教研、学会などでの発表などの機会をとらえて、ことあるごとに自分の授業の記録をとってこられた。前著の『授業は発見だ』(あすなろ社)の「あとがき」にも「寺島先生、美紀子先生の勧めがなければ、本箱の片隅で眠っていたたくさんの資料はやがてリサイクルに出される運命だったでしょう」との記述がみられる。このことを見ても、山田先生がいかに過去の実践の記録を綿密に取り、大切にしてくられたのかが読み取れる。実践記録を書くことは、その実践が積み上げられ、ステップ・アップをするきっかけとなるということが容易に想像できる。私など文字通り「爪の垢を煎じて飲まなければならないなあ」と思わずにはいられなかった。そんなことから、今回のわずか3時間の授業について記録を書いてみようと思った。こんな記録を書くだけでも多大の時間を要した。このような記録は本来、自分の授業日誌として保管しておけばいいものだろうが、第三者が見て理解できる記録にしようとする相当に事細かに説明を含めて書くことになり、その中で新たな発見も出てくる。また、誰かが読んでくれて、何かコメントがもらえるかもしれないという期待も持てる。そして、本研究会(註)のように少人数の限られた空間ではあるが、自由に ML で投稿することができる環境があることは有難いことである。それも、いつでもいいし、分量も全く自由ということで、便利な世の中になったものだと思う。

(註：寺島隆吉先生が主宰する「国際教育総合文化研究所」のことで、私はこの研究所の準研究員である。これは寺島先生が岐阜大学を定年退職されてから起ち上げられたもので、旧「記号研」を発展的に解消して現在の研究所になった。)

(9) 教材としてのマララのノーベル賞受賞演説への懸念

マララの演説は、彼女と年代の高校生には特に強いインパクトを与える。DVD を見終わると、マララの台詞を真似て生徒が英語の台詞を言いだすことから、そのことが分かる。そのようにインパクトの強い演説だからこそ、一方で強い懸念もある。マララはタリバンに銃撃された。このこと自体は許し難い蛮行である。しかし、この蛮行そしてマララの演説は、一歩間違うとアメリカの対テロ戦争を正当化する根拠にされる恐れがある。9. 11 事件後、アメリカが攻撃したのはアフガニスタンであった。当時、9. 11 に関わったとされるアル・カイダのオサマ・ビン・

ラディンを引き渡さないとして、アメリカはアフガニスタンのタリバン政権を軍事攻撃して崩壊に導いた。翌年には大量破壊兵器を持っている悪の枢軸国としてイラクを攻撃、フセイン政権を崩壊させた。そして結局、大量破壊兵器などなかったことが後に明らかにされている。これらの戦争で夥しい数の人々が犠牲となった。これらの戦争は他国の政権を力づくで、アメリカの政治的経済的都合で倒す暴挙であるとしたか、私には思えない。

アメリカはこのマララの演説を自分たちの都合のよいように最大限に利用することが想像される。また、現状のままでも、アメリカの対テロ戦争は正しいと多くの人々の心に刷り込まれてしまう可能性がある。マララはアメリカについてどのように思っているか。「無人機での爆撃はテロリストを増やす温床になる」とオバマ大統領に述べたとのことだが…。またこのノーベル賞受賞演説の中でも次のように述べている。Why is it that countries which we call “strong” are so powerful in creating wars but are so weak in bringing peace?これを読む限り、「私たちが強いと呼んでいる国」は、アメリカを指しているとしたか思えないのだが…。そして、この演説を教材に使うことによって、学生たちに世界で展開してきたアメリカの戦争政策は当然のことだとの思いを持たせてしまうのなら、自分としては本意としか言いようがない。そのことを簡単にではあるが、生徒にも述べたが、説明不足言葉足らずのところがあり、しっかりと伝わったかは怪しい。そんな懸念を持った。

追記)

アメリカのアフガニスタン（2001年）とイラク（2003年）への軍事攻撃の犯罪性を告発する翻訳書『アフガニスタン悲しみの肖像画』（明石書店 2004年）と『冬の兵士』（岩波書店 2009年）を共訳書として出版させていただいたことがある。

『アフガニスタン悲しみの肖像画』は、「平和な明日を求め 9.11 遺族の会」(Peaceful Tomorrows) (9.11 で肉親を失った人たちが構成され、アメリカの報復戦争に反対した平和団体)が、アメリカの空爆によるアフガニスタンの被害の調査をし、その結果をまとめた小冊子の翻訳書。Peaceful Tomorrows のクリスティナ・オルセンさんたちが来日した時、彼女のコンサートを私の地元岐阜で開催した。この催し物の活動の経緯については、新英研の東海ブロック集会でレポート報告させていただいた。

『冬の兵士』は、2008年3月に「反戦イラク帰還兵の会」(IVAW) が主催したイラクとアフガニスタンからの帰還兵による「冬の兵士」公聴会での勇気ある兵士たちの証言集の翻訳書。2009年に「冬の兵士 日本ツアー」が東京、名古屋、沖縄などで開催され、私も名古屋集會に参加、夜の懇親会では帰還兵たちと交流をした。「平和をめざす翻訳者たち」TUP によるこの本の翻訳プロジェクトの活動および「反戦イラク帰還兵の会」の紹介も、新英研東海ブロック集会でレポート報告させていただいた。

以上のような翻訳活動に、かつて情熱を傾けたことがある私にとっては、「教材としてのマララ演説への懸念」には切実なものがある。

第四部 マララの英語音読授業の準備はどのようになされたのか

—山田昇司先生との対話—

(1) マララ演説を学年全体で行うことになった経緯

2年生8クラスの「コミュニケーション英語」担当者は、私を含めて3名いた。1月の下旬に、授業や学年末試験の打ち合わせをした時、このままでいくと2月の中旬に新しい第9課を授業することになるが、時間的に言って途中までしかできないことが分かった。そんなことがあり、どうしようかということになったので、私は3年生で冬休み明けにマララ演説の授業を短時間でやったことがあり、2年生でもやってみませんかと提案したところ、タイムリーなものなので是非取り組みたいということになった。

実は昨年冬休みに入る前の全校集会で、校長先生はマララの演説を取り上げて全校生徒に訓話をされていた。マララが銃撃され救急車で運ぶところや国連での演説部分のニュース映像を体育館のスクリーンに映して、教育の機会を不当に奪われているパキスタンの女の子たちの実情やそれに立ち向かうマララの姿をまず紹介された。そして、教育を受けられることがいかに貴重な

ことなのかを述べられ、マララと同年代の生徒たちに真剣に懸命に学校での勉強に取り組んでほしいことを訴えられた。最後に **One child, one teacher, one book, and one pen can change the world.** という国連演説の一節を復唱して、校長先生は話を締めくくられた。というわけで、このこともマララ演説を授業に取り上げた一因となった。この集会での校長訓話で生徒にはマララについての一定の背景知識（コンテンツスキーマ）が与えられているのも、授業を進める上では助けになるだろうことが想像された。

ところで、冬休み直後に行った3年生のマララ演説の私の授業の大きな反省点は、リズム読みの練習をせず、いきなり「群読」の練習をして生徒たちに発表させたことで、やはり「リズムよみ」から授業をすべきだったということだった。したがって、マララ演説の授業では、たっぷり「リズムよみ」を入れた形の授業計画を考えようと思っていた。

この2年生では、幸いにもすでに学年全体で「リズムよみ」の授業を行ってきている。12月下旬から1月上旬には第7課 Part 1、2月上旬には第8課 Part 2の「リズムよみ」音読テストをそれぞれ2時間ずつ実施していた。いずれもすでに一通り授業でやったところの、復習として、この音読テストを行っていた。この「リズムよみ」の学年の共同実践を土台とすれば、マララ演説の授業の取り組みもかなりスムーズにできるのではないかという期待があった。

このマララ演説の授業は、山田昇司先生の『英語教育が甦えるとき』（2014 明石書店）の中の大学における「レ・ミゼラブル」の授業を、高校の英語の授業に取り入れる形で行おうとしたものだ。したがって、この授業の準備にあたっては、何度も山田先生にメールや電話で連絡をとりアドバイスを求めた。私が作成したプリントに赤で訂正を加えて送っていただいたり、メールで連絡するのが困難な細部については電話で懇切丁寧に教えていただいた。以下はその記録である。

（2）授業計画はどのように立てられたのか（1月25日）

二年生三名の担当でマララ演説を授業でやることになった。そのために授業のやり方について簡単な授業計画を策定する必要が出てきた。

山田先生の『英語教育が甦えるとき』の中の p. 251 に書いてある「レ・ミゼラブル」の大学の15時間の授業の一覧から、その授業計画を考えようとした。そこで、再び電話（1月25日）でいくつかの質問をさせてもらった。

岩間 「リズムよみ」から「群読表現よみ」にどのようにつながっていくのか分からない。「リズムよみ」の練習をしておいた後に、群読でやりなさいと生徒に言った時、生徒はペンを打ってやるのですかと聞いてくることが想像されるのだが、どうしたらよいでしょうか。

山田 「群読」は、あくまでおまけみたいなもの。基本的に「リズムよみ」で生徒たちが読めること、音読を楽しむことが大切。「群読」では難しいことは考えず、全員が声をそろえて出せていることを確認できればよいのではないのでしょうか。「振り」をつけるなどは、条件や指示の中に入れなくても、生徒たちは班によっては勝手にやり出すでしょう。「群読」ではお互いの息を合わせて読んでいくことがポイントなので、音読のシナリオを作る時、その点を考えたほうがいいです。

（岩間の思ったこと）「表現よみ」という言葉にとらわれて、私はいかに表情豊かに感情を込めて読ませるかということを考えていたのですが、到達目標を「リズムよみ」ができることにしているのはシンプルで分かりやすいと思いました。「群読」のシナリオについては、前回はAとBのそれぞれが範囲が大きいので細かく交代で読ませる形のものに変えようと思いました。前回3年生でやったとき、AとBの生徒が別々に練習していたので、それでは「息を合わせる」練習にならないので。

岩間 マララの演説は27分ある。前回3年生で視聴させた時、11人中2人がしっかり聞けませんでした。44人ものクラスになると、生徒の実態からして私語をするものも出てくる可能性があります。どうしたらよいでしょうか。

山田 私も大学で、その長さのDVDをいっしょに見せることには躊躇します。一部を見せて、あとは見たい生徒が家でYou Tubeで見えるように仕向けたほうがいいかもしれません。

（岩間の思ったこと）やはり必要などころあたりを短めに見せようかなあ。

岩間 マララについてコンテンツスキーマ（背景知識）を与える資料を何か知っていますか。

(答) 後日、メールで「マスコミに載らない海外記事」を紹介してもらった。前回はウィキペディアからとった資料を使用した。今回はこの記事を資料1、2、3として作成し、授業で使うつもりだ。資料2と3は無人飛行機の攻撃の民間人犠牲者の話で、前回3年生で感じた「マララ教材への懸念」を解消できないかと考えて作った資料。

岩間 細かい質問になりますが、p.251の「読解プリント自習」というのは「読解プリント」と表記してある後半部分とやっている内容が違うのでしょうか。また、授業が静動静と区切っているが、「読解」プリントの時は静まり返っているということでしょうか。

山田 前者については、同じことをやっていて何も違いはありません。静動静は学生個人レベルの話で、授業は読解プリントの取り組みと同時並行で音読テストをしているので静かではありません。

(その後の岩間と山田先生との間で交わした話)

「全体の時間数が足りない時は、トップで音読テストを合格した生徒たちに小先生として、可否を決めるのを手伝ってもらおう方法もあります。これは寺島先生が岐陽高校でおこなった私のマザーグースの”The House That Jack built”の授業を見学されたときのアドバイスです」と山田先生からアドバイスをもらいましたが、私は平常点に入れるので、生徒に可否を決めさせるのは抵抗があると話しました。

<岩間から山田先生へのメール 2015年1月25日>

山田先生、色々とお知恵を出していただき、ありがとうございました。
以下は、2月中旬に行う予定の簡単な授業案(2年生担当教師に示すためのもの)を作成しました。資料1～3(p.24～p.26のFileE,F,G)とマララの授業で扱う部分も添付します。

マララのノーベル賞受賞演説の授業プラン

(この授業の時は単語テストや英検のExercise問題はやらないこととする)

1 時間目

- ①授業で音読練習をする最後の3分間の部分のテープリスニング
- ②資料1を読む(教師が読んでやるか、生徒に指名して読ませる)
- ③Part 1の英文をクラス全体で「リズムよみ」練習する
- ④2人～4人のグループを決めさせる。
- ⑤グループごとの音読テストをする
(合格した生徒たちには、携帯ボックスの上に読解プリントを置いておき、順次持っていくかせて、自習の形で取り組ませる)

2 時間目と3 時間目

1 時間目と全く同じ手順で行う。
ただし、②で2 時間目は資料2を、3 時間目は資料3を読むこととする

4 時間目 国際交流室か視聴覚室が集まるように連絡しておく。

- ①マララ演説のDVDのChapter 5(最後の6分半の演説部分。読解プリント4枚はこの部分全てをプリントにした。)を視聴する。
- ②(そのままその移動教室で、あるいは教室に戻らせて)
全員でマララ演説すべてを「教科書読み」(「リズムよみ」ではなく、通常の読み方で読む)でコーラスリーディングで練習する。
- ③4名から6名の新しい「群読」グループを決めさせ、グループ内でさらにAとBの役割分担を決めさせる。AとBと全員の部分をグループごとに「群読」の音読練習させる。
- ④グループごとに「音読のみきわめテスト」をする。ここでは、ペンはたたかず「教科書読み」とする。合格基準は、「全員がそろって声を出していること、読み方がバラバラにならず息があっていること」とする。
(合格した生徒たちには、携帯ボックスの上に読解プリントを置いておき、順次持っていくかせて、自習の形で取り組ませる)

5 時間目

- ①もし、まだ「音読みきわめテスト」が終わっていなければ、その続きをやる。
- ②全部のグループが合格したら、「群読」をクラスの前に出てプレゼン発表を各班の立候補でやらせる。(この時は、他者評価の用紙を配布し、聞いている生徒たちには、その用紙を記入させる。結果については、集計して発表する。一番成績のよかったグループにはアンコール発表をさせ、ボーナス点2点を加点する)
- ③授業の感想文記入用紙を作成しておき、その用紙に記入させる。

以上のファイルを山田先生に送り、電話で話したことはこれでよかったか確認したところ、このファイルを読んで、さらに山田先生が気づいたことを電話いただいたので、以下にその内容を述べる。この電話の話も私には貴重な話であった。

山田 ④の段階でペンはたたかず教科書読みをするとあるが、ここは「リズムよみ」をしたほうがよい。せっかく「リズムよみ」を練習したのだから、「リズムよみ」のほうがいいです。「全員そろって声を出す」という指示もたぶんいらなんでしょう。生徒たちは群読の時は、そのように考えて読むと思います。

岩間 群読の時も「リズムよみ」をするのでしょうか。

山田 それは生徒たちにまかせておけばいいです。「リズムよみ」でするグループもあれば、ペンはたたかず「リズムよみ」のように読むグループも出てくるでしょう。

山田 資料1, 2, 3を少しづつ授業の最初に読むのはとてもいいです。ひとつひとつの分量も適当です。資料3のナビラの記事は、彼女の写真を入れられないのでしょうか。私も彼女の写真を見て、胸がつまりました。資料2と3は、「マララ演説への懸念」(註)を解消する手段としてもよい資料です。私も実践するときにはこの資料を使いたいと思っています。

岩間 この実践は学年全体で3名の教師でやる予定なので、担当教員にもこの事実は押さえておいてほしかった。このプリントがないと、やはり教師の心の中に無意識にアメリカの対テロ戦争は「正義の戦争」だと心に刷り込まれる可能性があるからです。

この授業では、読解プリントを合格者の自習課題にするつもりです。まったく授業の中では読解はやらないつもりなので、生徒だけでやりきれぬプリントをどう作ればいいのか考えています。単語のすべてのヒントがついていて、フレーズごとに番号がついていて、英文に記号付けがされていて、さらに全訳も与えようと思っています。

山田 私の作成中のプリントをメールで送りました。

岩間 あのプリントは見ました。確かにあのプリントだったらできると思います。時間との闘いなので、私にそれを作成する時間があるかどうかということがあります。

(註) 3年生での授業実践をまとめた第三部「マララのノーベル賞受賞演説を授業で取り組んで」の中の「(9) 教材としてのマララのノーベル賞受賞演説への懸念」に書かれていること。簡単にいえば、マララのノーベル賞受賞演説を読むことが、アメリカが繰り広げてきた世界での戦争政策への肯定の気持ちが生徒や教師の心の中に刷り込まれることを危惧することを指していた。

(3) 読解プリントはどのように作成されたのか (1月29, 30日)

2年生学年全体の授業準備のひとつとして、マララのノーベル平和賞受賞演説の読解プリントを途中まで作成した。この途中まで作成したもの (File L) を山田先生に送り、アドバイスを求めてから、プリントを完成させることにした。この読解プリントは、「リズムよみ」グループ音読テストや群読みきわめテストが合格した生徒たちのための課題である。マララの授業では、音読のみを扱い、読み取りについてはすべて読解プリントの課題のみとする予定だった。したがって、この読解プリントは、相当に英語学力のない生徒でも取り組めば必ずできるプリントにする必要があった。そのような観点で、このプリントは作成した。

<山田先生へのメール>

山田先生

マララの授業の準備をすすめています。音読テストの時に、同時並行で行う読解プリン

トはすでに翻訳ソフトで作ったものはあるのですが、山田先生が作成していたようなプリントのほうが、生徒は分かりやすいと思われます。そのプリントを作成しかけたのですが、それを添付して送ります。もし、おかしいところがあるなら、また教えて下さい。なお、番号付けは手書きでしようと思っているので、まだついていません。フレーズ訳プリントにするつものものです。明日にでも電話させていただきます。

岩間 2015年1月29日

File L のプリント原案を送付したところ、山田先生から以下のようなメールといっしょに改定案 File M をいただいた。

(山田先生からのメール)

岩間先生

変更箇所は以下のとおりです。
マクロの形式から順にあげると、

- 1 ページ設定の変更
- 2 フォントの縮小 (英文と語義の両方)
- 3 語義の行の上方詰め

語義の与え方については、フレーズ訳したときに自然になるようなものにしました。単語を覚える必要はなく、意味をとれるようにすればいいと考えたからです。センマルセンの並べかえをするように一部の語義を語順どおりに戻しました。足し算訳は、センスグループの固まりが順に積み上がるようにしたつもりです。語義で、後置修飾になるところだけに[]をつけてみました。

追記

フレーズ訳の語義が後置修飾の意味になっているときに、そこに[]をつけることは寺島美紀子先生が最初に考案されたアイデアである。

それまでのリズムよみプリントでは、英文の下にはカナが付いていたのであるが、そのスペースにフレーズ訳が与えられた。そうすることで学習者は英文の意味を意識しながら、音読の練習をすることが可能になった。そしてさらに後置修飾に相当するフレーズ訳に[]をつけることで、その前のフレーズ訳との関係がより明確につかみやすくなった。

今回のプリントではそのアイデアを使わせてもらっている。

なお、このカナ付きなしのプリントでは、読み方が分からない単語については教師の範読時に学習者が書きとったり、グループ内の相互援助によって確認されている。

2015年 1月30日 山田

File M のような改定案をもらってから、山田先生に電話をして、意見交換をした。そのやりとりを以下に紹介する。

岩間 改定案の英文の番号付けどが、1 センテンスが終わっても通し番号になっているが、何故なのでしょう。私は英文一文づつに番号を①②③・・・と付け、そのそれぞれに 12345 と番号を付けています。

- 山田 最初は上下の文がひとつになっていたので続き番号になっていました。分割してそれぞれに番号を振った方が私もいいと思います。ところで、自分の改定案を実際にやってみましたが、足し算訳のところは、何度も同じことを書くことになるので、ちょっとわずらわしいかなと思いました。生徒独力で意味を取らせるのが目的なので、足し算訳のところは最初から答を書いておくという方法もあります。
- 岩間 私は全訳は与えておいて、フレーズごとの意味を書く読解プリントにしようかなと考えています。Be 動詞の訳のことですが、「ある」「いる」とするのが、記号研の定式だと記憶している。「です」としたほうが分かりやすいところもありますが、それはだめなのでしょうか。
- 山田 それで生徒が意味をとれるなら、このプリントではそれでいいと思います。
- 岩間 改定案では関係詞にも意味が与えてあります。そうしたほうがいいと思いました。最初の **who brought change** は、私は「変革をもたらした」としました。改定案は「その人たちはもたらした 変革を」となっていました。この改定案のほうが、センマルセンの英語の基本構造を考えさせられるのでいいと思いました。
- 山田 低学力の学生にも最低限の基本構造を復習させることは大切ですね。
- 岩間 確認ですが、□の連結詞について、接続詞は[]の外に配置し、関係詞や間接疑問文の疑問詞は[]の中に配置するということがよかったですでしょうか？接続詞は節と節を文字通りつなぐ役割なので、[]の外にあるという理解でいいのでしょうか？
- 山田 それでいいと思います。関係詞や疑問詞は文の要素となっているので[]の中に配置されます。連結詞のひとつである関係詞は通常は□で囲みますが、継続用法の場合は、例えば< ~,when= ~,and then>なので、□で囲むのか2重線を引くべきなのか迷います。
- 岩間 そのような疑問は初めて聞きました。ところで、英文の番号付けで、左上に小さく数字が打ってあります。これはどのようにしたのでしょうか？
- 山田 ワードでは、まず、数字を単語の前に普通に打ちます。その数字をアクティブにして、右クリックします。フォントをクリックします。「上つき (p)」を選びます。フォントのサイズを決めます。OK をクリックして完了です。このとき対象になる数字すべてを **Ctrl** を押しながらアクティブにすれば、一度にこの操作ができます。ついでにもうひとつ。英文とリズム記号やカナ振りの間の行間を縮めたいときに使う技ですが、上の行に近づけたい行の部分を選択してアクティブにします。右クリックをして、「段落」を選びます。「行間」の中の「固定値」を選び、行間を 10 ポイントぐらいにすると、上の行に近づけることができます。

File L (山田先生に送付したプリント)

Dear brothers and sisters, great people, [who (brought) change],
親愛なる 兄弟たち と 姉妹たち 偉大な人々 [変革をもたらした]

[like Martin Luther King and Nelson Mandela, Mother Teresa and
[~のような マーチン・ルーサー・キングとネルソン・マンデラ、マザー・テレサとアウンサン・スーチー]

Aung San Suu Kyi], once (stood) here [on this stage]. I (hope) the
かつて 立ちました ここに [このステージ上の] 私 期待している

steps [that Kailash Satyarthi and I (have taken) so far and
歩み カイラシュ・サトヤルティと私 とってきた これまでに そして

(注: カイラシュは子どもの教育を受ける権利を推進してノーベル賞を受賞したインド人)

(will take) [on this journey] (will also bring) change – lasting
これからとるだろう [この旅で] もたらすだろう 変革 永続的な変革
change.

My great hope (is) that [this (will be) the last time, this (will be)
私の大きな望み ある これ なるだろう 最後 これ なるだろう

the last time [we (must fight) [for education]. (Let's solve) this
最後 私たち 戦わねばならない [教育のために] 解決しましょう これ

[once and for all]. We (have already taken) many steps. Now it (is)
[きっぱりと] 私たち すでにとってきました 多くの歩み 今 それ ある

time [to take) a leap]. It (is) not time [to tell the world leaders [to
時 [飛躍をする] それ ある ない 時 [世界の指導者に告げる

realise)[how important education (is)]]] - they already (know) it –
[認識するよう [教育がいかに重要であるのか]]]] 彼ら すでに 知っている それ

their own children (are) [in good schools]. Now it (is) time [to call)
彼ら自身の子供たち ある [いい学校に] 今 それ ある 時

them [to take) action [for the rest [of the world's children]]].
[彼らに呼びかける [行動を取るように [残りの者たちのために [世界の子供たちの]]]

File L と File M のプリントも、動詞の上の部分にセンがなく、○で囲まれていないが、実際はすべて○で囲まれる。

File M (山田先生の改定案)

1 Dear brothers and sisters, 2 great people, 3 [who (brought) change],
親愛なる 兄弟 と 姉妹のみなさん 偉大な人々 その人たちは もたらした 変革を

4 [like Martin Luther King and Nelson Mandela, Mother Teresa and
[~のような マーチン・ルーサー・キング と ネルソン・マンデラ、 マザー・テレサ と
Aung San Suu Kyi], 5 once (stood) here [on this stage].
アウンサン・スーチー] かつて 立ちました ここ このステージ上に

1
2
3
4
5
2+3+4+5

6 I (hope) 7 the
私 期待している

steps 8 [that Kailash Satyarthi and I (have taken) so far 9 and (will take)
歩み それ カイラシュ・サトヤルティ と 私 とってきた これまでに そして これからとるだろう
[on this journey]] 10 (will also bring) change – lasting change.
この旅で また もたらすだろう 変革 永続的な変革

6
7
8
9
8+9
7+8+9
10
7+8+9+10

¹ My great hope (is) ² that [this (will be) the last time, ³ this (will be) the last time
 私の大きな望み [次のことである] それは… これ なる 最後のとき これ なる 最後のとき
⁴ [we (must fight) [for education]. ⁵ (Let)'s | solve this [once and for all].
 [私たち 戦わねばならない 教育のために] ~しよう 解決する これ きっぱりと
⁶ We (have already taken) many steps. ⁷ Now it (is) time [to | take] a leap].
 私たち すでに歩んできました 長い道のり 今 (それ) ある 時 [飛躍をする]

1 2 3

4

3+4

1+2+3+4

5

6

7

⁸ It (is) not time ⁹ [to | tell] the world leaders [to | realise) ¹⁰ [how] important
 (それ)ある ない 時 [世界の指導者に告げる 認識するように いかかに重要か
 education (is)]]] — ¹¹ they already (know) it— ¹² their own children (are) [in good
 教育 ある] 彼ら すでに 知っている それ 彼ら自身の子供たち ある いい学校に
 schools]. ¹³ Now it (is) time ¹⁴ [to | call them [to | take] action ¹⁵ [for the rest
 今 (それ) ある 時 [彼らに呼びかける 行動を取るように 残りの全てのために
 [of the world's children]]].
 [世界の子供たちの]

8 9

10

9+10

11 12

13 14

15

(4) 「リズムよみ」プリントはどのように作成されたのか (2月7日)

2 年生学年全体の授業の準備のひとつとして、マララのノーベル賞受賞演説の「リズムよみ」プリントを作成した。そのプリントをメール (2015年2月7日) で山田先生に送り、アドバイスを求めたところ、返信があり以下の改定案 (File K) をもらった。その後、この改定案について、電話で意見交換をしたので、以下にまとめる。

岩間 「カナは全文に付けた方がいい」とあります。最初、そのように作成したが、カナ振りが英文の行より多くなったり、ごちゃごちゃしたりして見にくくなったので、誰でも読めると思える単語はカナ振りを取りました。

山田 授業をすると極端に英語を苦手とする学生が、読み方を教えてほしいと聞きにくるので、その対応への煩わしさを避けるために、全文にカナを振ることもあります。

発音は・□弱強である。この **adult** も文全体のリズムからこのような発音になったと思われ

る。このことについては後に山田先生から、辞書にも **adult** は第一音節にアクセントがあるものも示されているとのことを教えてもらった。)

岩間 **last time** の部分は、マララは一語一語強く読んでいると思うので、原案でいいのではと思っています。

or a boy	in a factory	Thank you
オア <u>ア</u> ボーイ	イン <u>ア</u> ファクトリ	サンク ユー
ラ	ナ	キュー

上記の連結の表記の仕方は知らなかったもので、助かりました。昔は、下線部は半弧を描いてその下にカナを振っていました。それだとワープロでは作成できないので困ったと思っていたところでした。前者二つの音の連結と、**Thank you** の音の連結は種類が違うのですね。前者2つはアをラに、アをナに読み変えているのに、**Thank you** の場合は、文字通り二つの音がつながっているみたいだ。

山田 私も最近このように2種類の連結を区別して表記するようになりました。

以上のやり取りの後、以下のメールを山田先生からいただいた。

岩間先生へ

投稿されたリズムよみに関する対話の中で、私自身の理解が十分でなくてわかりにくいところがありましたので補足します。

単語のアクセントが移動するのはよく起こることで、これは寺島先生から伺った話ですが、dictator という単語はチャップリンは映画の中で ta のところを強く読んでいるが、最近はこの単語は dic が強く読まれることが多いということです。「名前・動後」という法則を聞いたことがあります、その影響なのでしょうか。これから母語話者以外の人が英語を使う機会がどんどん増えてくるとこのような現象がより頻繁に起こるかもしれません。(手元にある辞書では両方のアクセントが表記され、しかも第1音節を強く読むほうが先に示されていました。)

チャップリンの演説といえば、in the seventeenth chapter of St. Luke it is written という一節がありますが、ここでは seventeenth は冒頭の se が強く読まれていて辞書のアクセント表記とは異なっています。

いま単語の内部でのアクセントの移動について述べましたが、内容語であっても弱になる、あるいは機能語であっても強く読まれるのはどんなときに起こるのかについては、寺島先生が書かれた『チャップリン「独裁者」の英音法』(あすなろ社)で説明されています。久しぶりに再読してみて、反復と対比という観点から英文を見てみるとこれほどたくさん発見があるのかと驚かされました。

なお最後に細かいことですが、or のカナは「オワ」ではなくて「オア」としたほうがいいかなと思いました。最初に見たときには気がつきませんでした。

追伸

最近模試やセンター試験の問題をあまり見ていなくて分からないのですが、単語単独のアクセント問題というのはよく出題されているのでしょうか。

2015年2月8日 山田

上記のメールに対して、以下の返信を送った。

山田先生

今年のセンター試験の発音問題は、一番最初にくる問題の二つ目がアクセント問題でした。河合塾のページにその問題があります。

<http://nyushi.nikkei.co.jp/center/15/1/exam/1110.pdf>

(Part 2)

○ ○ . . .

We are living in the modern age and we believe that nothing

リビング モダン エイジ ビリーブ ナッシング

. . . .
is impossible.

イズ インポシブル

○

We have reached the moon 45 years ago and maybe will soon

リーチトゥーン ムーン フォーティ イェアーズ アゴウ メイビー スーン

. ファイブ . forty-five は 3 音節

land on Mars.

ランド マーズ

. ○ . ○ ○

Then, in this 21st century, we must be able to give every child

ゼン トゥエンティ ファースト センチュリー エイブル ギブ エブリ チャイルド

. twenty は 2 音節

. . . .

quality education.

クオリティー エデュケーション

.

Dear sisters and brothers, dear fellow children, we must

ディア シスターズ アン(ド) ブラザーズ ディア フェロウ チルドレン マスト

. . . . ○

work... not wait.

ワーク ウェイト must work と not wait は韻を踏んだ対句のように聞こえる

(Part 3)

.

Not just the politicians and the world leaders, we all need to

ノット ジャスト ザ ポリティシヤンズ アン(ド) ザ ワールド リーダーズ ウイ オール ニード トゥ

. ○ . .
 . . . ○ . . 2通り考えられるが、私なら後者をとる。

. . ○ ○ ○ ○ . . .

contribute. Me. You. We. It is our duty.

コントリビュート ミー ユー ウィー アワ デューティ

. . . マララはリズムの流れで第1音節を読んでいる。辞書では第2音節だが。

. ○ .

Let us become the first generation to decide to be the last ,

レット アス ビカム ザ ファースト ジェネレーション ディサイド ラスト

B

□ . . □ . □ . . □ . . □ . ○ . □
let us become the first generation that decides to be the last
レット アス ビカム ザ ファースト ジェネレーション デイサイド ラスト

. □ □ . □ . □ □ . . □ .
that sees empty classrooms, lost childhoods, and wasted
シーズ エンプティ クラスルームズ ロスト チャイルドフッド ウエイステッド

. □ .
potentials.
ポテンシャルズ

A

□ . ○ . □ □ . . □ . . □ □ .
Let this be the last time that a girl or a boy spends their
レット ラス (ト) タイム ガール オワ ア ボーイ スペンズ
□ .
ラ r-linking は上のカナに下線
脱落のカナにはカッコ
※ 原案のとおり □ □ でもいいように思えますが…。

□ . . . □ .
childhood in a factory.
チャイルドフッド イン ア ファクトリー
ナ n-linking も上のカナに下線

B

□ . ○ . □ □ . . □ . □ . . . □ . □
Let this be the last time that a girl is forced into early child
レット ラスト タイム ガール フォーストウ イントウ アーリー チャイルド
□ .
marriage.
マリッジ

A

□ . ○ . □ □ . . □ □ . □ □ . □
Let this be the last time that a child loses life in war.
レット ラスト タイム チャイルド ルーズィズ ライフ ウォー

B

□ . ○ . □ □ . . □ □ . □ □ . □
Let this be the last time that we see a child out of school.
レット ラスト タイム シー チルド アウト スクール

全員

□ . □ . ○
Let this end with us.
レット エンド ウイズ アス

□ . □ . □ . □ . □ . □ . □ . □
Let's begin this ending ... together ... today ... right here, right
レッツ ビギン エンディング トゥゲザー トゥデイ ライト ヒア ライト

. □ . □ . □ . □ □ . □ . . □ . □
now. Let's begin this ending now. Thank you so much.
ナウ レッツ ベギン エンディング ナウ サンク ユー ソ マッチ
キュ

連結のカナに下線 □ .

(5) 発音のカナ振りをめぐって (2月13, 14日)

そしてマララ演説の授業を目前にして、また新たな疑問が湧いてきたので、山田先生に以下のようなメールを送った。

山田先生

来週からマララの授業をします。これまでの教科書の「リズムよみ」は復習でやっていました。したがって、一度すでに単語を発音したり、本文を読んだりしていました。だから、「リズムよみ」のときは、再度読んでいることになります。ところがマララの場合は、全く音読していない英文です。先生の大学での「リズムよみ」では、いきなり「リズムよみ」をやってみえるのでしょうか。今日、教科書の「リズムよみ」テストをしていたら、単語の発音そのものがしっくりできない生徒がいました。

そうすると、マララの演説の音読については、教科書の新出単語でやる単語単独の発音練習といったものや、通常を読みを先にやってから「リズムよみ」をしたほうがいいのかという疑問が湧いてきました。また、教えて下さい。

2015年 2月13日 岩間

山田先生から以下の返事もらった。

拝復 岩間先生

以下に返答を書きましたが、不明の点については、今日は1日家におりますので先生のご都合のよいときに電話をかけてください。

マララの演説の音読について、そうすると、教科書の新出単語でやる単語単独の発音練習といったものや、通常を読みを先にやってから「リズムよみ」をしたほうがいいのかという疑問

プリントによみカナが付いていても、リズムよみテストに入る前に、よみがなが読めるかどうかを教師が確認することは必要だと思います。ですから、教師が範読を聞かせるときに（これはリズムよみでいいのですが）、難しい語は立ち止まって復唱させるような手立てをされるといいと思います。

カタカナで書いてあってもそれをきちんとその通りによめるとは限らないからです。これは日本語学力の問題です。以下に述べることは、リズムよみプリントにカナが振っていない場合の話ですが、参考までにご紹介します。

私の4年前の実践では、「カナよみテスト（個人）」→「リズムよみテスト（グループ）」→「発表（個人）」という順番で授業を行っていたことがありました。これは私がリズムよみグループテストのときにリズムどころかカナすらきちんと読めずにテストを受けている者がいることに気づいたからでした。このときは私は寺島美紀子先生の実践を追試（全く同じ英文）していたのですが、美紀子先生は「リズムよみテスト（グループ）」→「通しよみテスト（グループ）」→「発表（個人）」というステップを踏んでおられました。

この違いには後で気づきました。つまり私の実践は美紀子先生の授業の完全な追試にはなっていないということです。あとで美紀子先生の記録を読み返してみると、カナよみについては教師の範読時に学生がカナを聞きとって記入する、グループでの練習のときに相互に教え合うことで（ときにはグループから教師のところに伝令が飛んでくることもある）カナが読めるようになっていたことが分かりました。

カナよみについてももうひとつ書き添えますと、寺島隆吉先生が一番最初に編集された **Singing Out** という歌のテキストにおいては、表紙の裏に載っている生徒が記入する自己進捗表に「カナよみ」→「リズムよみ」→「暗唱」というステップが示されています。つまり、教師は「リズム」の前に学習者が「日本語としてのカナ」がきちんと読めるか（あるいは教師が発音するカナを書き取れるかどうか）を確認する必要があるということです。

最後に結論的なことを繰り返せば、リズムよみグループテストに入る前の教師の範読において

難しい単語については繰り返して復唱しておくという事です。

2015年 2月14日 山田

このメールのやり取りの後、メール返信へのお礼を含めて、山田先生に電話をした。

岩間 メールへの返信ありがとうございました。おおむね理解できました。寺島隆吉先生が「カナよみ」→「リズムよみ」→「暗唱」という順番で Singing Out に取り込まれていたとはこれまで気が付きませんでした。

山田 定時制に勤務してみえた時に、「カナよみ」からやる必要があったのだと想像されます。ただ、先生の著書の中には「カナよみ」テストを実施したという記述はありません。

岩間 山田先生は、4年前に「カナよみテスト（個人）」→「リズムよみテスト（グループ）」→「発表（個人）」という手順で授業をしておられたとのことですが、「カナよみテスト」というのは、一人一人にカナよみをさせたということでしょうか。

山田 そうです。この時は、音読プリントにはリズム記号はあっても、カナ振りはしていませんでした。教師が模範音読した時に、分からないところはカナを振るなど、読めるようにして下さいと言うのですが、横着な生徒はそのような面倒なことはサボり、結局単語を読めないということがあったので、この時は「カナよみテスト」を「リズムよみ」テストの前にやったと記憶しています。先生のマララの授業の場合は、すでにカナ振りがしてあるので、たぶん大丈夫だと思いますよ。

岩間 昨日、教科書の「リズムよみ」テストをしていた時、matter という単語に、マターとカナ振りしてあったのに、ある生徒はユターと読みました。教科書の英文は、「リズムよみ」する前にすでに新出単語を発音し、本文はコーラス・リーディングもしています。その後の「リズムよみ」の段階でも、こんなことが起きました。マララ演説の場合、「リズムよみ」をするのが初めての音読となります。生徒たちが間違えずに読めるか心配です。

山田 しかし、教科書の英文よりマララ演説の英文の方が簡単じゃないですか。

岩間 はい、そう思います。

山田 それに、とてもリズムカルで、音読も心地よくやりやすいと思います。だから、そんなに心配することはないのではありませんか。

岩間 確かにそうですね。3年生で読ませた時も、かなり生徒たちはスラスラと読んでいた気がします。「リズムよみ」全体練習のとき、難しそうな単語は生徒たちに繰り返し復唱させます。もうひとつの心配事です。音読テストをたぶん4時間はしなければならないこととなります。音読テストの合格者への課題は、読解プリント4枚と視写プリント2枚を用意しましたが、それで課題が足りているかということです。課題が足らずに、生徒たちが遊びだしても困ります。

山田 最近、私は自分が作成した課題プリントをやってみています。先生も自分でやって時間を計ってみてはどうですか。私自身も以前はそんなことは面倒でやらなかったのですが、最近は自分でも書き込んでみてどれくらいの時間がかかるかを確認するようにしています。そうすると所要時間が分かるだけでなく、プリントのミスが見つかったり、記入スペースの窮屈なことに気づいたりすることがよくあります。

岩間 なるほどね。何事も手間を惜しまないことですね。

上記の電話のやりとりの後、以下のメールを山田先生からいただいた。

岩間先生

以下の部分について考えたことを書きます。

昨日、教科書のリズム読みテストをしていた時、matter という単語に、マターとカナ振りしてあったのに、ある生徒はユターと読みました。マとユを読み間違えたのでしょう。教科書の英文は、リズム読みする前にすでに新出単語を発音し、本文はコーラス・リーディングもしています。その後のリズム読みの段階でも、こんなこ

とが起きました。マララ演説の場合、リズム読みをするのが初めての音読となります。生徒たちは間違えずに読めるか心配です。

この生徒は「マ」を「ユ」と読み間違えています。これは手書きの「マ」が「ユ」のように見えたのかもしれませんが。（もちろん、これはカナが活字でない、という前提の話になりますが。）

この生徒以外の多くの生徒がよみを間違えなかったのはカナを読むときにその上にある matter も自然に眼に入って「ユ」に見えたかもしれないカナを自動修正して「マ」と読んでいる可能性があります。

ということは「ユ」と読み間違えた生徒は日本語力がないというよりもむしろ眼の力がない、つまり視野 eye span が狭いとも言えます。

話が少し変わりますが、私は昨日、先生と電話で話したときに、カナが振ってあっても自分があまり聞いたことのない単語であればよみずらいのではないかと、言いましたが、このことは逆に言うと、耳になじんだカタカナは頭の中に音の残像が残っていて、それも手助けにしてカナをよんでいるということです。

私にも同様の体験があります。「クローン」という言葉が最初に報じられた頃ですから、もう十数年も前のことです。私はまちがって「クーロン」と言って生徒に「クローン」と訂正されたことがあるのです。

私はこの言葉を新聞で読んで知っていましたが、自分では使ったことがありませんでした。ところが生徒は生物の授業か何かで教えてもらってが耳に馴染んでいたのだと思います。

私は最初に「クーロン」と読み間違えて覚えてそのまま頭に記憶していて、それを口に出したのです。ですから、そのときに「クローン」という言葉をみても頭に残っている残像に引きずられて誤ってよんだかもしれないと想像します。

つまり、私が言いたいことは、カナをよむということはただ単にカナがよむのではなく、自分の頭の中にある類似の音を参照してよんでいるのかしれないと言うことです。

英語が苦手な生徒の頭には「類似音」に相当するものはほとんどありませんので、仮に一個一個のカナはよめたとしても一続きになったカナをスムーズによむことは難しいのかもしれませんが。

2015年2月15日 山田

第五部 マララの英語音読授業はどのように行われたのか

(1) 準備した教材

この授業を実施するにあたっては次のものを準備した。

- ①リズム記号とカナ振りをした音読プリント（1枚）File A
（裏面はこの授業の5時間の予定、平常点を自分で記録するための一覧表）File B
- ②フレーズ訳書き込み用の読解プリント（4枚）File C
- ③フレーズ訳が書いてある両面刷り英文視写プリント（2枚）File D
- ④マララ演説資料1 「誰も耳にしないマララ達」（1枚）File E
マララ演説資料2 「米国無人爆撃機による爆撃被害者」（1枚）File F
マララ演説資料3 「マララとナビラ：天地の差」（1枚）File G

- ⑤グループ音読他者評価票 File H
- ⑥音読テスト班員名簿表、群読テスト班員名簿表 File I
- ⑦授業の感想記入プリント
- ⑧マララノーベル平和賞受賞演説のDVD
- ⑨マララノーベル平和賞受賞演説のダビングテープ
- その他に二年生担当者閲覧用の「マララの授業計画案」File J

全員

.

Dear sisters and brothers, /the so-called world of adults may

ディア スィスターズ アン(ド) ブラザーズ ザ ソーコールド ワールド オブ アダルトズ メイ

.

understand it, / but we children don't.

アンダースタンド イト バットゥ ウィ チルドレン ドントッ

A

.

Why is it /that countries which we call strong are so powerful

ホワイ イズ イト ザット カントリーズ フィッチ ウィ コール ストロング アー ソー パワフル

.

in creating wars /but are so weak in bringing peace?

イン クリエイティング ウォーズ バットゥ アー ソー ウィーク イン ブリンギング ピース

B

.

Why is it /that giving guns is so easy /but giving books is so

ホワイ イズ イト ザット ギビング ガンズ イズ ソー イージー バットゥ ギビング ブックス イズ ソー

hard?

ハード

A

.

Why is it, /why is it /that making tanks is so easy, /but building

ホワイ イズ イト ホワイ イズ イト ザットゥ メイキング タンクス イズ ソー イージー バットゥ ビルディング

.

schools is so hard?

スクールズ イズ ソー ハード

(Part 2)

B

.

We are living in the modern age /and we believe that nothing

ウィーアー リビング イン ザ モダン エイジ アン(ド) ウィ ビリーブ ザットゥ ナッシング

. . .

is impossible.

イズ インポッシブル

A

.

We have reached the moon 45 years ago /and maybe will soon

ウィ ハブ リーチトゥ ザ ムーン フォーティ イアーズ アゴウ アン(ド) メイビー ウィル スーン

. ファイブ

land on Mars.

ランド オン マーズ

B

.

Then, in this 21st century, /we must be able to give every child

ゼン イン ジス トゥエンティ ファースト センチュリー ウィ マスト ビ エイブル ギブ エブリ チャイルド

. . . .

quality education.

クオリティー エデュケーション

全員

.

Dear sisters and brothers, /dear fellow children, /we must

ディア スィスターズ アン(ド) ブラザーズ ディア フェロウ チルドレン ウィ マスト

work... not wait.

ワーク ノット ウェイト

(Part 3 前半)

全員

.

Not just the politicians and the world leaders, /we all need to

ノット ジャスト ザ ポリティシャンズ アン(ド) ザ ワールド リーダーズ ウィ オール ニード トゥ

.

contribute. Me. You. We. It is our duty.

コントリビュート ミー ユー ウィー イット イズ アワ デューティ

A

.

Let us become the first generation /to decide to be the last ,

レット アス ビカム ザ ファースト ジェネレイション トゥ ディサイド トゥ ビー ザ ラスト

タ

B

.

let us become the first generation /that decides to be the last /

レット アス ビカム ザ ファースト ジェネレイション ザットゥ ディサイズ トゥ ビー ザ ラスト

タ

.

that sees empty classrooms, lost childhoods, / and wasted

ザット スィーズ エンプティ クラスルームズ ロスト チャイルドフッド アン(ド) ウェイステッド

. .

potentials.

ポテンシャルズ

A

.

Let this be the last time /that a girl or a boy spends their

レット ジス ビー ザ ラスト タイム ザットゥ ア ガール オア ア ボーイ スペンズ ゼア

.

childhood in a factory.

チャイルドフッド イン ア ファクトリー

ナ

(Part 3 後半)

B

.

Let this be the last time /that a girl is forced into early child

レット ジス ビー ザ ラスト タイム ザットゥ ア ガール イズ フォーストゥ イントゥ アーリー チャイルド

.

marriage.

マリッジ

A

□ . ○ . □ □ . . □ □ . □ . □ . □

Let this be the last time /that a child loses life in war.

レット ジス ビー ザ ラスト タイム ザットウ ア チャイルド ルーズイズ ライフ イン ウォー

B

□ . ○ . □ □ . . □ . □ □ . □

Let this be the last time /that we see a child out of school.

レット ジス ビー ザ ラスト タイム ザットウ ウィ スィー ア チャイルド アウト オブ スクール

全員

□ . □ . ○

Let this end with us.

レット ジス エンド ウィズ アス

□ . □ . □ . . □ . . □ □ □ . □

Let's begin this ending/...together ... today ... right here, right

レッツ ビギン ジス エンディング トゥゲザー トゥデイ ライト ヒア ライト

. □ . □ . □ . □ □ . □ . □

now. Let's begin this ending now. Thank you so much.

ナウ レッツ ビギン ジス エンディング ナウ サンク ユー ソ マッチ

キュ

File B

マララ演説の授業予定表（生徒向け）

<おおまかな予定>

1 時間目 Part 1 「リズムよみ」音読テストの全グループの合格（2名～4名のグループ）

2 時間目 Part 2 「リズムよみ」音読テストの全グループの合格（2名～4名のグループ）

3 時間目 Part 3 前半 Part 3 後半 この時間では最低目標として、Part 3 前半のすべての班の音読テストの合格。Part 3 後半は早く進んだ班から挑戦して合格。

4 時間目 Part 3 後半に合格していないすべての班の合格。
その後、4名から6名の新しいグループを作り、Part 1～Part 3 全体の英文をプリントに示されている A、B、全員のパートを声とタイミングを合わせて「群読」練習する。

（1～4 時間目で合格したグループから、英文読解プリント No.1～No.4 と視写プリントを順次を取り組む。これらのプリントは音読テストを合格したグループだけが取り組む権利を持つ）

5 時間目 グループによる群読のプレゼン発表をクラスの前に行う。この時は「群読の表現読み」ということで、マララになったつもりで感情を込めて読むように心がける。このプレゼンは A(2点) B(1点) C(0点)の3段階で評価をする。

<評価> 各自で記録して下さい。

音読テスト

音読テスト Part 1	音読テスト Part 2	音読テスト Part 3 前半	音読テスト Part 3 後半	群読プレゼン	合計
点	点	点	点	点	点

（各 2 点）群読プレゼンは時間の許す範囲で立候補順に行う

プリント課題

読解プリント No.1	読解プリント No.2	読解プリント No.3	読解プリント No.4	視写プリント A	視写プリント B	合計
点	点	点	点	点	点	点

（各 1 点）

File C

マララのノーベル平和賞受賞演説 2014年12月10日 於：オスロー
(最後の6分半の部分)

No.1

①¹Dear brothers and sisters, ²great people, ³[who (brought) change],
親愛なる 兄弟たち と 姉妹たち 偉大な人々 彼ら もたらした 変革
⁴[like Martin Luther King and Nelson Mandela, Mother Teresa and
[~のような マーチン・ルーサー・キング と ネルソン・マンデラ、 マザー・テレサ と
Aung San Suu Kyi], ⁵once (stood) here [on this stage]. ②¹I (hope) ²the
アウンサン・スーチー] かつて 立ちました ここに [このステージ上の] 私 期待している
steps ³[that Kailash Satyarthi and I (have taken) so far ⁴and
歩み カイラシュ・サトヤルティと私 とってきた これまでに そして
(注：カイラシュは子どもの教育を受ける権利を推進してノーベル賞を受賞したインド人)
(will take) [on this journey]]⁵ (will also bring) change – lasting change.
これからとるだろう [この旅で] もたらすだろう 変革 永続的な変革
③¹My great hope (is) that ²[this (will be) the last time, ³this (will be)
私の大きな望み である 次のこと これ なるだろう 最後 これ なるだろう
the last time ⁴[we (must fight) [for education]. ④(Let's solve) this
最後 私たち 闘わねばならない [教育のために] 解決しましょう これ
[once and for all]. ⑤We (have already taken) many steps. ⑥Now it (is)
[きっぱりと] 私たち すでにとってきました 多くの歩み 今 それ である
time [to take] a leap]. ⑦¹It (is) not time ² [to tell] the world leaders [to
時 [飛躍をする] それ ある ない 時 [言う 世界の指導者たち
realise] ³[how important education (is)]] ⁴- they already (know) it –
[認識するよう [いかに重要で 教育 ある]] 彼ら すでに 知っている それ
⁵their own children (are) [in good schools]. ⑧¹Now it (is) time ²[to call]
彼ら自身の子供たち いる いい学校に] 今 それ ある 時
them [to take] action ³[for the rest [of the world's children]]].
[彼らに呼びかける [行動を取るように [残りの者全員のため [世界の子供たちの]]]
⑨¹We (ask) the world leaders ²[to unite) and make) education their
私たち 要請する 世界の指導者たち [団結し 教育を彼らの最重要事項にするよう]
top priority].
⑩¹Fifteen years ago, ²the world leaders (decided) ³[on a set of global
15年前に 世界の指導者たち 決定した [一連の地球規模の目標
goals, the Millennium Development Goals]. ⑪¹[In the years [that
国連ミレニアム開発目標] [年月で
(have followed)], ²we (have seen) some progress.
[次に続いてきた] 私たち 見てきた 一定の進歩

No.2

①¹The number [of children out of school] (has been halved), ²as
数 [学校に行けない子どもの] 半減した ~ように
[Kailash Satyarthi (said). ②¹However, the world (focused) only [on
[カイラシュ・サトヤルティ 言った] しかし 世界 焦点を合わせた ~だけ
primary education], ²and progress (did not reach) everyone.
[初頭教育に] そして 進展 届かなかった 全員
③¹[In year 2015], representatives [from all around the world] ²(will
[2015年に] 代表 [世界中の]
meet) [in the United Nations] ³[to set) the next set of goals, the
会うだろう [国連で] 決めるために 次の一連の目標
Sustainable Development Goals. ④This (will set) the world's
持続可能な 開発 目標 これ 決めるだろう 世界の

ambition [for the next generations].

野望 これからの世代のための

⑤¹The world (can no longer accept), ²the world (can no longer accept)

世界 もはや受け入れることはできない 世界 もはや受け入れることはできない

that ³[basic education (is) enough]. ⑥¹Why (do leaders accept) that

それ 基礎的な 教育 ある 十分で なぜ 指導者 受け入れる それ

²[[for children [in developing countries]], ³only basic literacy (is)

子どもたちにとって 発展途上国の 基礎的な読み書きだけ ある

sufficient, ⁴when [their own children (do) homework [in Algebra,

十分で ~ときに 自分たち自身の子どもたち する 宿題 ~の 代数

Mathematics, Science and Physics]]?

数学 科学 物理

⑦¹Leaders (must seize) this opportunity ²[to guarantee] a free,

指導者たち とらえなければいけない この機会 保証する 無料で

quality, primary and secondary education ³[for every child].

良質の 初等の そして 中等の 教育 すべての子どもたちののために

⑧¹Some (will say) ²[this (is) impractical, or too expensive, ³or too hard].

何人かの人々 言うでしょう これ ある 非現実的で あるいは 高価すぎる あるいは 難しすぎる

⑨Or maybe even impossible. ⑩¹But it (is) time ²[the world (thinks)

あるいは おそらく 不可能だとさえ しかし それ です 時 世界 考える

bigger].

より大きなこと

No.3

①¹Dear sisters and brothers, ²the so-called world [of adults] (may

親愛なる 姉妹たち と 兄弟たち いわゆる 世界 大人の

understand) it, ³but we children (don't. ②¹Why (is) it that ²[countries

理解するかもしれませんが それ しかし 私たち子ども (理解)しません なぜ~なのか 国々

[which we (call) strong] ³(are) so powerful [in creating] wars] ⁴but

それら 私たち 呼ぶ 強い ある とても 力強い 戦争を起こすことでは のに

(are) so weak [in bringing] peace? ③¹Why (is) it that ²[giving] guns (is)

ある とても 弱い 平和をもたらすことでは なぜ~なのか わたすこと 銃 ある

so easy ³but giving] books (is) so hard]? ④¹Why (is) it, ²why (is) it that

とても 簡単で のに 与えること 本 ある とても たいへんで なぜ~なのか なぜ~なのか

³[making] tanks (is) so easy, ⁴but building schools (is) so hard]?

作る 戦車 ある とても簡単で のに 建てる 学校 ある とても 難しい

⑤¹We (are living) [in the modern age] ²and we (believe) ³that [nothing

わたしたち 生きている 現代に そして 私たち 信じている それ 何もない

(is) impossible]. ⑥¹We (have reached) the moon 45 years ago ²and

ある 不可能で 私たち 到達した 月 45年前に そして

maybe (will soon land) [on Mars]. ⑦¹Then, [in this 21st century], ²we

おそらく すぐに着陸するだろう 火星に ですから この21世紀に 私たち

(must be) able [to give] every child quality education].

与えることができなければなりません すべての子ども 良質の教育

⑧¹Dear sisters and brothers, dear fellow children, ²we (must work)...

親愛なる 姉妹たち と 兄弟たち 親愛なる 仲間の 子どもたち 私たち 働かねばならない

not wait). ⑨¹Not just the politicians and the world leaders, ²we all

待つのではなく ~だけでなく 政治家たち と 世界の指導者たち 私たち皆

(need) to contribute). ⑩Me. You. We. ⑪It (is) our duty.

必要がある 貢献する 私 あなた 私たち それ ある 私たちの義務

No.4

①¹(Let) us become) the first generation ²[to decide] [to be) the last ,
~しましょう なる 最初の世代 最後になることを決める

³ (let) us become) the first generation ⁴[that] (decides) [to be) the last ⁵[that
~しましょう なる 最初の世代 それ 決める なること 最後 それ

(sees) empty classrooms, lost childhoods, and wasted potentials].

見る 空っぽの教室 失われた子ども時代 そして 無駄にされた可能性

②¹(Let) this be) the last time ²[that] a girl or a boy (spends) their childhood
これを~にしましょう 最後 少女 や 少年 過ごす 彼らの子ども時代

[in a factory]].

工場で

③¹(Let) this be) the last time²[that] a girl (is forced) [into early child
これを~にしましょう 最後 少女 強いられる 児童婚を

marriage]].

④¹(Let) this be) the last time ²[that] a child (loses) life [in war]].
これを~にしましょう 最後 子ども 失う 命 戦争で

⑤¹(Let) this be) the last time ²[that] we (see) a child out of school].
これを~にしましょう 最後 私たち 見る 子ども 学校に行けない

⑥(Let) this end] [with us].

これで終りにしましょう 私たちで

⑦¹(Let)'s begin) this ending ² ... together ... today ... right here, right now.

始めましょう この終り いっしょに 今日 まさしくここで まさしく今

⑧(Let)'s begin) this ending now.

始めましょう この終り 今

⑨(Thank) you so much.

ありがとう とても

このファイルは Part 1 から Part 4 の4枚のプリントで、右ページにはフレーズ訳を書く欄がある。便宜上、その欄は省略した。また、裏面にはそれぞれのパートの全訳も載せたが、その部分もここでは載せていない。

動詞はマルで囲むことになっているが、ワードでプリントを作ると、(brought) のように上の部分をセンで囲えない。実際のプリントは手書きで、動詞の上の部分もセンが引いてあり、動詞はマルで囲まれた状態になっている。

File D 英文視写の左側のページ

①1	親愛なる兄弟姉妹よ	2	偉大な人々
	3	彼らは変革をもたらした	
	4	マーチン・ルーサー・キング、ネルソン・マンデラ、マザー・テレサ、アウンサンスーチーのような	
	5	かつてこのステージ上のここに立ちました	
②1	私は期待しています	2	歩み
	3	カイラシュ・サトヤルティと私がこれまでとってきた	
	4	そしてこの旅でこれからとるであろう	
	5	変革をもたらす ー永続的な変革を	
③1	私の大きな望みは次のことです		
	2	これが最後になることです	
	3	これが最後になることです	
	4	私たちが教育のために闘わなければならない	
④	きっぱりとこれを解決しましょう		
⑤	私たちはおおきな歩みをすでにとってきました		
⑥	今、飛躍するときです		
⑦1	それは時ではありません		
	2	世界の指導者たちに認識するよう言う	
	3	教育がいかに重要であるか	
	4	彼らはすでにそれを知っています	
	5	彼ら自身の子どもたちはいい学校にいます	
⑧1	今それは時です	2	彼らに行動をとるように呼びかける
	3	世界の子どもたちの残り全員のために	
⑨1	私たちは世界の指導者たちに要請します		
	2	団結し教育を彼らの最重要事項にするように	
⑩1	15年前に		
	2	世界の指導者たちは決定しました	
	3	一連の地球規模の目標である国連ミレニアム開発目標を	
⑪1	それに続く年月で		
	2	私たちは一定の進歩を見てきました	

英文視写プリントの右側のページ

日本語のフレーズ訳を見て、その部分に相当する英語を書きなさい。

2年()組()番 名前()

①1	2
3	
4	
5	
②1	2
3	
4	
5	

File E

(マララ演説 資料1) 出典「マスコミに載らない海外記事」
<http://eigokiji.cocolog-nifty.com/blog/2012/10/post-a48c.html>

誰も耳にしないマララ達

Wendy McElroy 2012年10月18日

ニュースを読んで読者は心を傷めておられよう。10月9日、パキスタンで、14歳のマララ・ユスフザイが、[タリバン武装集団](#)に、頭部を二度射撃された。彼女は専門医療と身の安全の為に移送されたイギリス、パーミンガムの病院で手当を受けている。医師団は“[快方](#)”を期待していると語っている。

マララは、タリバン基地となっている、パキスタン北西部のスワット渓谷で、少女の教育を推進する上で、重要な役割を果たしているために、暗殺の標的とされたのだ。支配権が行きつ戻りつする際、何度かタリバンは、スワットにおける女子教育を禁止していた。

マララは2009年、11歳の時、BBCのブログに、タリバン支配下の生活を記録し、平和を求めた投稿を続けて有名になった。2009年1月9日、[彼女はこう書いていた](#)。

「昨日、軍のヘリコプターとタリバンの恐ろしい夢を見た。スワットで軍事作戦が始まってから、そういう夢をみるようになった。タリバンが少女全員に通学を禁止する布告を発令したので、学校に行くのがこわい。クラス27人のうち、11人しか学校に来なかった。タリバンの布告のせいで、人数が減ったのだ。

学校から家への帰り道、男の人が“お前を殺してやる”と言っているのが聞こえた。私は歩調を早めたが… ほっとすることに、男は携帯電話で話していて、誰か他の人を電話で脅かしていたのに違いない」

(中略)

マララは一夜にして、反イスラム教過激派と、少女教育を目指す女性の戦いの国際的シンボルとなった。世界中の集会で、抗議行動参加者達は“[我々は全員マララだ](#)。”というポスターを掲げている。

子供が銃撃されることに何ら肯定的な要素などないのだから、私はこうした反応を、良い面やら“肯定的な”結果として言及しているわけではない。そして、こうした意見の噴出も遅きに失したものだ。もしもパキスタンや世界中の人々が、これほど長い間、子供に対する残忍な仕打ちを容認してこなかったなら、マララ銃撃は起きていなかったろう。

File F に続く

File F

マララはオバマ大統領と会見した時、無人機による爆撃をやめてほしいと言ったということだが、無人機による爆撃で、パキスタンはどのような被害を受けているのか、以下の記事を読んでみよう。

マララ演説 資料2

<http://eigokiji.cocolog-nifty.com/blog/2012/10/post-a48c.html>

(出典「マスコミに載らない海外記事」2012年10月18日 Wendy McElroy の記事)

9月、スタンフォード法科大学院とニューヨーク大学法学大学院は、“無人機の下で暮らす: パキスタンにおけるアメリカの無人機攻撃実施による、民間人に対する死、負傷とトラウマ”と題する共同研究を発表した(PDF)。

2004年以來、パキスタンの抗議にもかかわらず、パキスタン北西部において何百回もの攻撃をするのに、アメリカ合州国は無人航空機、無人機を活用してきた。無人機はテロリストを狙う上で、外科的に正確で、僅かな“巻き添え被害”しか引き起こさないと歓迎されてきた。通常、巻き添え被害とは民間人を不具にしたり殺害したりすることを言う。

共同研究は“この表現は嘘だ”と断言している。研究はパキスタンでの犠牲者や人道支援や医療援助担当者との130件のインタビューを含む“9カ月の徹底的な調査”の後に発表された。発表には、ロンドンに本拠を置く独立したジャーナリスト組織、Bureau of Investigative Journalism (BIJ)の研究結果も含まれている。

入手可能なデータに基づくBIJの**最良推定値**によれば、2004年6月から、2012年9月中頃までに、パキスタンでの無人機攻撃で、2,593人から3,365人を殺害した。474人から884人は、少なくとも176人の子供を含む民間人だ。1,249人から1,389人が負傷した。他にも死者の証拠もあるというが、未確認だ。

(中略)

パキスタン現地の経験が豊富なCNN記者、ピーター・バーゲンは無人工機攻撃の“効率”について報じている。彼はこう書いている。

2004年に開始されて以来、無人機作戦で、49人の過激派指導者を殺害したことが、少なくとも二つの信頼できる情報源によって確認されている。これは過激派の指揮系統にとって大きな打撃ではあるが、この49人の死は、無人機による全死亡者数のわずか2%にすぎない。

一方、ほとんどが民間人居住地である地域の絶え間ない爆撃が、テロリストや過激派集団の新兵応募の急増を招いているという証拠もある。

File G

(マララ演説 資料3) 以下は無人機の攻撃で肉親をなくしたナビラの話です。

マララとナビラ: 天地の差

マララ・ユスフザイと違い、ナビラ・レマンは、ワシントン DC で大歓迎されなかった。

2013年11月1日 11:15 ムルタザ・フセイン (「アルジャジーラ」の記事より)

<http://eigokiji.cocolog-nifty.com/blog/2013/11/post-0501.html>「マスコミに載らない海外記事」

2012年10月24日、8歳のナビラ・レマン、兄弟達、そして祖母が家の側の畑で働いていると、北ワジリスタン上空を飛行するプレデター無人機が出現した。来るべきイードの祝日に一家が準備をする為、祖母のモミナ・ビビは、子供達にオクラの摘み方を教えていた。ところが、この日、一家の暮らしの行方を永遠に変えてしまう恐ろしい出来事が起きた。子供達は、空でCIAが運用する無人機が発する独特のブーンという音を聞いた。24時間それにつきまといまわっているパキスタンの田舎の村人には聞き慣れた音だが、その後、二度大きなカチッという音がした。無人飛行機は、致命的な爆弾をレマン一家に向けて発射し、この子供達の人生は、瞬時にして、苦痛の悪夢、混乱と恐怖へと変えられてしまった。子供7人が負傷し、ナビラの祖母は彼女の目の前で殺害されたが、この行為に対しては何の謝罪も、説明も、正当化も行われていない。

先週、ナビラと、教師をしている父親と、12歳の兄が、[自分達の話](#)を語り、あの日の出来事についての答えを求める為、ワシントン DC にまで旅してきた。しかしながら、遥か彼方の村からアメリカ合州国まで、信じがたいほどの障害を乗り越えてやって来たにもかかわらず、ナビラと家族は露骨に無視された。議会聴聞会での彼らの証言に、出席したのは、430人の議員のうち、わずか5人だった。ナビラの父親は、[わずかな出席者達](#)にこう語った。“娘はテロリストの顔をしていませんし、母親も同じです。私には全くわけがわかりません、一体なぜこういうことが起きたのか… 教師として、アメリカ人に、私の子供達がどのようにして負傷したのかを教え、知らしめたいのです。”

通訳は彼らの話を[訳しながら感情を抑えきれず泣いた](#)が、政府はこの一家を、あえて鼻であしらい、政府が彼等にもたらした悲劇を無視した。印象的な薄茶色の目をした9歳のほっそりした少女ナビラは、証言として、素朴な質問をした。“私のおばあさんが一体どんな悪いことをしたのですか？” この問いに答えるものは誰もおらず、聞きに行く人々すらまれだった。(中略)

ナビラ・レマンへのアメリカの対応を、パキスタン・タリバンにすんでのところ暗殺されかけた少女、マララ・ユスフザイへの対応と比較するのは有意義だ。マララはその勇敢な行動に、欧米マスコミ有名人、政治家、市民運動指導者から敬意を表されているが、ナビラは、過去十年間のアメリカによる戦争によって、その人生を破壊された何百万人も無名の顔の見えない人々のもう一人となったに過ぎない。この非常に顕著な違いの理由は明らかだ。マララはタリバンの犠牲者なので、その抗議の内容にもかかわらず、彼女は、[アメリカの]主戦論者が利用できる有効な政治宣伝手段として見なされているのだ。

File H

グループ群読 他者評価票

2年（ ）組（ ）番 評価者氏名（ ）

No.	発表代表者名	評価	良かった点	良くなかった点
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				

① 評価 ABで記入（投票の7割以上が集まったAあるいはBを評価とする。7割に満たない時は、教科担任が評価を決める）

A（2点） 全員が声を出してそろっている。

B（1点） そろっていない部分や、声が出ていない部分がいくつかあった。

② 自分のグループには斜線を入れて記入しない。

③ もう一度聞いてみたグループの番号を○で囲む。

File I

群読プレゼン班員名簿

役割	クラス・出席番号	生徒氏名
A	2年 組 番	
	2年 組 番	
	2年 組 番	
	2年 組 番	
B	2年 組 番	
	2年 組 番	
	2年 組 番	
	2年 組 番	

リハーサル		群読プレゼン	
-------	--	--------	--

(2) 授業の概要

各担当者には5～6時間の予定で、授業プランを私が示した。それぞれの担当者はそれを見て授業をしたので、だいたい同じことをやっていたと思われる。しかし、担当者によって多少のやり方のバリエーションがあったかもしれない。以下が「マララの授業計画案」の最終版であった。この授業プランは二転三転四転して、下記のようになった。第四部の(2)の「授業計画はどのように立てられたのか」を読んでもらうと分かることであるが、当初、4時間目に群読の「みきわめテスト」をする予定だった。しかし、その時間的余裕がないことが分かってきたので、その「みきわめテスト」がなくなり、群読練習をしていきなり全てのグループにプレゼンをしてもらうことに変更した。

File J

マララのノーベル賞受賞演説の授業プラン (教師用) 四訂版

(この授業の時は単語テストや英検の Exercise 問題はやらないこととする)

1、2、3、4時間目

1時間目の冒頭に全体の授業の流れを簡単に生徒に説明する。

- ①授業で音読練習をする最後の3分間の部分のテープリスニング
- ②資料1(1時間目)資料2(2時間目)資料3(3時間目)を読む(教師が読んでやるか、生徒に指名して読ませる)
- ③Part 1(1時間目)Part 2(2時間目)Part 3 前半(3時間目)Part 3 後半(4時間目)の英文をクラス全体で「リズムよみ」練習する
- ④2人～4人のグループを決めさせ、グループで「リズムよみ」の練習をさせる。
- ⑤グループごとの音読テストをする

(合格した生徒たちには、携帯ボックスの上に読解プリントを置いておき、順次持っていかせて、自習の形で取り組ませる。視写プリントは読解プリントが終わるまでは出しておかない。→1枚目と2枚目の視写プリントの日本語欄が、読解プリントの答となっているので。)

合格できなかったグループは、放課後などに受けにきてもいいことにする。

5、6時間目

- ①DVDのChapter 5(6分半)を見せる。(DVDの扱いについては担当者の判断で行う)
 - ②クラスの前でのプレゼンの順番を、じゃんけんやくじで決めさせる。
 - ③クラスの前に出て、群読のプレゼンをさせる。
- この時間内にすべてできなかった時は、6時間目を使って群読のプレゼンの続きを行う。

プレゼンでは、すべての生徒に他者評価をさせる。

教師は各グループにA(2点)B(1点)C(0点)の評価をする。教師の評価が優先されるが、生徒の評価も参考にすることとする。(具体的に言えば、8割以上の生徒がAの評価を出した場合は、それをそのグループのA評価とする。)

群読の評価の基準は以下のようにする。

- A 評価 全員がそろって大きな声を出せている。
B 評価 声を十分に出していない生徒がいるが、全体としては音読できている。
C 評価 全く読んでいない人がいるなど、合格と認められない。

(3) 1時間目の授業

この授業は、私は2クラス担当していた。他の担当者の先生方は、いずれも3クラス担当していた。ここでは、私の2クラスでの授業の様子を述べる。

i) A・Bクラスでの様子(2015年2月16日<月>)

授業が始まったときに、別の担当者からもらったインターネットから取ったマララの写真を黒板に貼ったら、Y君が「イスラムでは写真や肖像画を掲示するのはだめだよ」と言っていた。また、「死刑囚の写真だな」とも言った。彼はフランスでの風刺画に関わるテロ事件が頭にあったのだろう。また、イスラム国の日本人2名の人質殺害事件も頭にあって、イスラム国が釈放を主張していた女性の死刑囚のことが浮かんだのだろう。「違う。ノーベル賞を受賞した17歳の女の子マララだ」と私は答えた。「ああ、この前、校長先生が話していたやつか」とY君は思い出したようだった。2カ月前の校長先生の話をよく聞いていたようであった。

まず、計画ではテープリスニングを最初にするようになっていたが、資料を読むことから始めた。この手順のほうが自然であると気づいたからだ。資料1はマララが銃撃された時のことが書いてあった。ある生徒が「マララは何故ノーベル賞をもらったのか？何をしていた人なのか？」と言った。この資料1はノーベル賞受賞前の記事だったので、ノーベル賞のことは何も書いてなかったことにその時、気がついた。次回からは資料1は差し替えか、別の資料を付け加える必要を感じた。ノーベル賞とマララの活動について、資料の中には触れられていなかったもので、口頭で「パキスタンでは女の子の教育の権利が奪われ、教育を受けられない世界の子どもたちのために、その権利を保障するよう運動をしていた。女子教育を禁止していたタリバンによって、命を狙われ銃撃された。命を狙われても、教育を受ける権利を子どもたちに保障しようとして運動していたことで、ノーベル平和賞を受賞した」と口頭で付け加えた。

その後、6分ほどのテープリスニングをした。次に、「リズムよみ」の音読練習をクラス全体で行った。予想した通り、教科書の「リズムよみ」に比べ、リズムカルで読みやすそうだった。他の担当者たちからも、生徒たちにとっては読みやすい英語のようだったと聞いている。

あえて難点を言えば、1行目の終わりから2行目のはじめの部分と3行目の終わりから4行目のはじめの部分が弱の音節が3～4個あるので、少し読みにくそうであった。

. . . □ .	□ □ . . . □ . □
may understand it	so powerful in creating wars
改定案→ . ○ . □ .	□ □ . . ○ . □ . □

上記に示したような改定案にすればさらに読みやすいと思われる。しかしinは前置詞なので、普通は強く発音されない。生徒の音読の力によってどうするか決めるのがいいだろう。

クラスの全体練習の後に、グループ分けをさせ、グループごとの練習を始めさせた。各クラスでは、2人から4人のグループが12から13個できた。ここまでですでに始業から15分は経っていた。それぞれがグループ練習を始めた。普段私語や居眠りでよく注意していたY君は、いつもペアを組むN君が休みだったので、「次の時間にN君と音読テストを受けることにする」と言った。私は「別の子たちとグループを作ってやって下さい」と言った。「それは無理だ」とY君はいい、この時間はその後は寝てしまっていた。彼は他の子たちとはグループを組めないようだった。教科書の音読テストをやった最初の時間は、一番に来て合格していたが、今回はそのようになってしまう。

2クラス全体としてはほとんどのグループが楽しそうに練習をしていた。私は、音読テストの順番を示す1から15の数字を板書して、生徒たちに希望の順番のところにグループの代表者名を書くように指示をした。生徒たちが黒板に書きに来た。そして、音読テストを開始した。この時点で、授業時間は30分ぐらい残っていたと思う。そして、かなり忙しかったけれども、すべてのグループが音読テストに時間内に合格できた。最後に余った2～3分で、前の時間の教科書の音読テストに不合格のグループが、再挑戦しにきて合格した。ほとんどのグループが楽しそうに音読テストも受けてくれた。

ただし、Y君以外にもう一人だけ例外がいた。いつも私語で落ち着きがなく注意をしなければならぬH君は、練習の時他のメンバーとあまり練習をしていなかったようだ。グループ音読練習のときも、ロパクのように見えたので、「もっと大きな声を出して」と私が言うと、「は～？ち

やんと声出しとるやないか！」という返事がもどってきた。よく聞いていると、小さな声が出ている時もあったが、ちょっと怪しかった。やはり練習をあまりやらなかったからだろう。でも、このやりとりの雰囲気でもた「大きな声を出しなさい」と私が言うと、また反抗的な態度で返答してくると思った。そのようなやりとりは教室の中では、否定的な雰囲気を生み出すので、それ以上深く追及しなかった。彼は、最初に教科書の「リズムよみ」の音読テストをした時は、とても大きな声を出していただけに残念であった。日によって随分と気分が違うようである。また、これまで教科書の音読テストで不合格にしたグループもあったが、陰険な雰囲気にはならず、「あ！不合格になってしまった」と言って、大笑いしながら不合格を受け入れていた。

授業が終わり、教室を出ようとする時、不合格になった女子のグループがすぐに再テストを受けに来て、私を困らせた。「次も別のクラスで授業があるので、昼休みか放課後にしてくれ」と私が言うと、「ちょっとだけだから、お願いします」と生徒が言って、押し問答があった。だから、そんな明るい雰囲気を私は壊したくないとの気持ちが働いた。H君は次の時間の「リズムよみ」音読テストはどのようにやるのだろうか？

2クラス81名いて、ほとんどの生徒が楽しそうに練習をし、音読テストを受けた。Y君とH君の二人が気になったが、私の授業に対するここでの評価は、81名中79名の生徒が積極的に授業に参加したことを高く評価したい。別の形態の授業の時は、授業の生徒の参加率はもっと低いというのが私の日頃の実感である。

ii) 代行授業のクラスでの様子(2015年2月18日<水>)

この1時間目の授業については、もう一クラスで授業をやってみる機会があった。学年担当者のK先生が年休でお休みだったので、あるクラスでマララの1時間目の予定のところを代行して授業をした。そのクラスの半分の生徒を私は「英語表現」で授業をしていたので、なんとか代行してできるだろうと思い、やってみた。マララ演説の「リズムよみ」練習をすると生徒に言ったら、ある男子生徒が「それはマララに失礼だろう」という反応。別の女子生徒は、「リズムよみ」プリントを配布したとき、「何、これ。もうこの読み方いやだ！教科書やりたい」という反応が返ってきた。私はこれを聞いて、私の代行の授業はうまくいくのだろうかかと不安に思った。この女生徒がこのように反応してきた理由は、教科書の「リズムよみ」プリントの1時間分はB5プリントの半分程度のもので、8行～10行の英文のプリントだったのに、このマララのプリントはB4にびっしり1枚印刷されていたので、そのような拒絶反応を示したと思われる。

しかし、1時間でやる分量は教科書の「リズムよみ」と同じであったので、実際に授業を始めたならクラス全体としてはとても楽しそうにやっていた。一人だけ例外がいた。いつも授業態度のよくないE君だ。彼はグループ練習の時、顔を伏せて寝ていたので、私は「グループで練習をしなさい」と声をかけると、「はあ？」と言って、なんでそんなことを注意されなければならないのかという態度だった。音読テストを始めた時点では、彼はうつ伏せになったままであった。音読テストの時、彼はどうするのだろうかとは私は思っていた。ロパクで形だけ音読テストを受けにくることを予想して、嫌だなあと思っていた。ところが少し時間がたったら、それまで別の場所で練習していた2名の同じグループの生徒たちがE君の席のところまで行き、練習を始めたことに私は気が付いた。その後、音読テストをそのグループが受けに来て、発音が違っているところで私がストップをかけてやり直すように言うと、E君が発音を間違えた生徒に「お前のこの単語の発音が違ってたぞ」と言って、もう一度音読をやり直して合格できた。ただし、音読テストが終わった後、他の生徒は課題プリントを一生懸命やっていたが、E君はまた伏せてしまっていた。しかし、いずれにしても全員音読テストを合格させ、代行の授業を無事終えることができ、ほっとした。この日は、「リズムよみ」の授業を3クラス+「英語表現」の授業もやったので、相当に疲れた。

1時間目の授業が終わったあとのM先生との会話。

M先生「ほんの少し前に、英語表現の授業で強調構文をやったけど、疑問詞が強調されている英文が難しかった。Who is it that ~?という英文がExercisesで出てきた。今日のマララの演説で、Why is it that ~?の英文が出てきたのは、タイムリーでしたね」
岩間「あ！これ強調構文なんですね。形式主語の文ではないので、何か変な文章だと思っていま

した。今、強調構文だと気づきました。Who is it that wants to see him?という Exercises の解答について、つい最近英語表現の授業で解説したばかりでした。それなのに、Why is it that～?が強調構文と気が付かなかったとは、英語教師として情けないなあ。というより、ほとんどボケてますね」

(4) 2時間目の授業

i) Aクラスの様子(2015年2月17日<火>)

1時間目に配布した資料1だけでは、資料として不十分だったので、急遽3年生で使用したプリントを増し刷りして持っていった。このプリントは、マララがどのような活動をしていたのか、なぜタリバンに命を狙われることになったのか、そして銃撃事件の概要も述べられていた。出典がウィキペディアだったので、完全に信用できる記事ではないかなという思いがあって、2年生での使用を見合わせていたプリントであった。量が裏表で1枚半あったので、全部読むには時間がかかると思い、最初の3分の1だけ読み上げてやり、残りは各自で読むように指示した。全体で読み終わった後も、何人かの生徒たちはその続きを読んでいた。また音読テストに合格してから、興味深げに読んでいる生徒もいた。この様子を見て、資料の提示の仕方として、授業時間内にすべて読まなければいけないという固定概念は捨てる必要を感じた。出だしだけ読んでやり、あとは各自で読むよう指示しておけば、興味ある記事ならば生徒たちは読み続けるだろう。

その後は、「リズムよみ」のクラスでの全体練習を行った。

□・□ □・□ □・□ □・□

4 5 years ago 2 1 st century

4 5は3音節、2 1も3音節だが、数字の幅が狭いため、上記のようにリズム記号がその数字をはみ出してしまったまま印字されていた。このために、私自身がクラスの前で「リズムよみ」をする時、4 5は問題なかったが、2 1 stは、□・□ と発音する誤りをした。ここ

2 1 st

は、プリント作成時にたとえば □・□ あるいは、□・□ というように表記すべき

2 1 st twenty first

であった。□が1 st から一つ後ろに行ってしまうので、そのような誤りが生まれた。やはり、リズム記号と単語の上下の部分は完全に一致させておかないと誤りが起きやすい。「リズムよみ」プリントの中の算用数字は、スペルで表記したほうが、きっと生徒も分かりやすいだろう。また、ここの読み方は □・□ のように強弱弱の読み方のほうがよかったかもしれない。

twenty first

マララもそう読んでいるし、山田先生もそのように言っておられた所だった。

全体練習のあとは、「リズムよみ」のグループ練習と音読テストを行った。前回教科書「リズムよみ」で不合格の経験のあったグループを注意して見ていると、彼らは課題プリントを一生懸命にやっていた。彼らの音読テストの順番が回ってきた時、「ちゃんと練習したかな？また不合格はいやだよ」と言ったら、「最初に一度合わせてみた。できそうだったので、課題をやっていた」との答えが返ってきた。だいじょうぶかなあと思いながら音読テストをしてみたら、なんとか合格した。一度だけの練習で合格できるような音読テストは少し簡単すぎるかなと私は思った。しかし、他のグループは結構何度も練習していた。だから、音読テストもスラスラと読めて合格していた。すべてのグループが音読テストに合格後、テープリスニングを行った。

ii) Bクラスの様子(2015年2月18日<水>)

Bクラスでも同じ手順で授業をした。このクラスは鐘がなっても着席していないので、私はいつも「席に着け」と大声を張り上げなければならない。「君たちは何回同じことを言われてもできないのだなあ」と、ついつい嫌味を言ってしまう。この日の授業もそうであった。「君たちのこの状態を見ていると、泣けてくるよ」と言うと、笑い声が起る。「何がおかしいのか。笑う場面ではないだろう？」というと、「うちのクラスとC組と比べてどちらがやばい？」とY君が聞いてくる。「このクラスに決まっているだろう。私は君たちのことは好きだけど、このだらしのなさに我慢がならない」と言ったら、どよめきが起きた。「君たちのことが好きだ」との言葉に対してだ

ったようである。本当は落ち着きのないこのクラスは疲れるので好きではないけど、いつも否定的なことばかりを言っていると、生徒との関係もさらに悪くなるので、意識的に「好きだ」と言った。まあ、私に対してもどことなく親近感を持っているようだし、だらしないけど、人間としては彼らのことを嫌いではないのは事実である。そんなやり取りで授業が始まった。

まず 2 1 st の部分について、スペルの上にあるリズム記号とスペルの間にずれがあるので注意するよう算用数字とスペルを板書して説明した。算用数字で書いてあるので、このようなズレが起きたと説明すると、Y 君が「算用数字じゃなくスペルで **twenty first** と書いてくれればよかったのに」と言った。的を得た指摘で、私もその通りだと思った。

気がかりだったのは、1 時間目に述べた H 君と上記で今話題にした Y 君のことであった。

H 君は 1 時間目は、ほとんどロパクの状態で前回は音読テストを受けていたので、2 時目もそのようになったらどうしようかと私は悩んでいた。「リズムよみ」している時に、ストップをかけた「声が出ていないのでやり直し」を指示しようか、それとも見逃してやり過ぎるか、私は迷っていた。この明るい雰囲気の中、その生徒と大声でやりあって、授業の雰囲気をぶち壊すことを懸念していたからだ。ところが、H 君はこの時間はグループの練習もしていたようだし、実際の音読テストでも声を出して、何の問題もなかった。1 時間目は、何か別の課題をやっていたようで、本人としても何か切羽詰っていて不機嫌で、グループ練習をしっかりとできなかったというのが実情だったようだ。しかし音読テスト合格後は、課題プリントには取り組まず、他の 2, 3 名の生徒と駄弁っていたようだ。このような状態でも H 君は課題は必ず全部提出して、辻褄を合せてくるのが常である。

Y 君は、彼のパートナーである N 君がこの日は授業に出席していたので、練習をした後にテストを受けに来て、まずその時間の音読テストに合格した。そしてすべての班が合格したとき、授業時間があと 5 分ほど余ったので、二人は前の時間の積み残し分の Part 1 も練習したので、音読テストを受けさせてくれと言ってきた。これも難なく合格した。「マララの音読テストは教科書の音読テストに比べると楽勝だ」と彼らは言っていた。いずれにしても、前回 Y 君は授業に参加していなかったのが、今回 2 回も音読テストを受けに来てくれて、私は嬉しかった。

(5) 3 時間目の授業

i) A クラスの様子 (2015 年 2 月 18 日<水>)

まず、資料 2 の無人機によるパキスタンでの被害について、私が生徒に読んでやった。その後、Part 3 の前半部分のみのテープリスニング、全体での「リズムよみ」練習と進んだ。この練習では、Let us は、レット・アスではなくレッタスに、or a boy は、オア・ア・ボーイではなくオアラボーイ、in a factory はイン・ア・ファクトリーではなくインナファクトリーで、「音の連結」があることに注意を喚起した。そしてグループ練習、グループの音読テストと進み、全員が時間内に合格できた。7~8 分ほど時間が余ったので、元の席に戻らせ、課題プリントをやるように指示した。生徒たちは、黙々と課題プリントをやっていた。

この時間に「リズムよみ」の生徒の練習を見ていて気が付いたことがある。contribute の発音を、

・ □ ・ □ ・ ・

contribute と発音すべきところを、contribute と発音している生徒がいた。ここはリズム記号をどのように付けるべきか、山田先生と議論になった箇所である。私の選択は、辞書の発音記号通りの記号付けであった。しかし、マララは後者の発音をしていた。生徒は授業の冒頭で、テープで一度だけ聞いただけなので、それを覚えていてそのように発音したのだろうか。「リズムよみ」で読んでいくと、やはりマララの読み方のほうが読みやすかったからではないのか。私も自分で読んでも、マララの発音のほうが読みやすい。ここでの記号付けはどうすべきか。

第一部の「リズムよみプリントの使い方と英語音声の原則」には「④文全体のリズム (文強勢) が個々の語のアクセント (語強勢) より優先する」との記述がある。そのことから言えば、マララの読み方の後者の記号付けが正しいのだろう。しかし、アクセントを問う模擬試験やセンター試験でこの単語が出た場合、誤答となってしまうのが、気懸かりだったので、辞書通りの記号付けにしたのだった。この contribute のような事例を見ると、単語一語のアクセント問題そのもの

が良くないのではないのかとさえ思えてくる。かつてセンター試験では、リズム記号のようなものがついた、文章の強勢問題があった。そのような問題のほうが適切だと考えられる。

「音の化学変化」について、マララの授業全体を終わってから気がついた部分がある。Part 3の前半の最後から出てくる **Let this be the last time** の中の **last time** の発音についてだ。音読プリントでは、単純に **last time** とカナ振りがしてあった。しかしここは、tの音がダブって

ラスト タイム

るので、ラストのトは「音の脱落」が起きているところであった。したがって、ここは **last time**
ラス(ト) タイム
とカナ振りするべきであった。生徒はここはどのように発音していたのか、思い出そうとしたが思い出せない。

ii) Bクラスの様子 (2015年2月19日<木>)

授業に行きあいさつをしようとして規律の号令がかかり、生徒たちが立つ。Y君とN君は前の時間から寝ていた様子で、伏せたまま。声をかけても起きないので、席まで行って腕をつついて起こし、やっと「礼」のあいさつができる。授業手順は、Aクラスと全く同じである。ほとんどの生徒たちは、楽しそうに音読練習や音読テストをしていた。

音読テストの希望の順番を黒板に書いてから、Y君とN君はまた寝てしまった。彼らの音読テストの順が回ってきたとき、まったく練習ができていなかったのので、練習するよう指示して、次のグループのテストを先に行った。Y君以外のすべてのグループが合格したので、Y君とN君の音読テストをした。N君が「先生、dutyは、汚いという意味か」と聞いてきた。「汚いはdirtyだ。ここは義務という意味だ」と私は答えた。「私も、あなたも、私たちも、それはみんな汚い」という意味になってしまうのではないかと思い、私は笑ってしまった。彼らの音読は練習不足のため、何回かつまっているうちに鐘がなってしまった。「今日は不合格だ」と、彼らに言って授業は終わった。Y君は「さっきのグループはcontributeのアクセントの位置が違っていただけなのに、ストップさせなかった。でも僕たちはストップさせられた。不公平だ」と言い出した。これは事実で、よく他のグループのテストを見ているなどと思った。「ああ、そうだね」と私は答えた。また「それに時間内にテストができないのはおかしい」とも言ったが、「時間がないと言っても、練習不足で時間がなくなったのだ。寝ていては音読の練習ができないだろ？ しっかりやりなさい」と私は注意を促した。

同じ3時間目の授業が終わった段階で、同じ学年担当のM先生が、自分の担任のクラスの「リズムよみ」への取り組みがよくないということを言われた。ほとんどのグループは一生懸命やるのだが、男子の2グループは練習の時、遊んでいて、音読テストも受けに来なかったとこぼされた。受けにこなかったのは、今回が初めてであるとのことだった。私は音読テストの時は、黒板に番号を1から15まで書いておき、グループの代表者名を生徒たちに書かせている。この番号順に音読テストを行っている。そのほうが生徒はいつ音読テストを受けられるか分かるので、それに合わせて生徒たちは練習ができる。いつ音読テストができるか分からない状況だと生徒は練習がしにくいのではないのかと、M先生に話した。そうしたら、「今度、そうやって、やってみます」と言っておられた。

また、M先生に課題プリントは音読テストに合格してからしか持っていけないことになっているのか尋ねたところ、それはそうしているとのことであった。つまり、音読テストに合格できなければ、先に進めないことになっていけば、否が応でも音読テストに合格しなければならないことになると思ったからだ。

もうひとつ。平常点の中間発表を口頭なり、掲示なりで知らせる方法もあるかもしれないということもお話した。

こんなやりとりをM先生としたので、もう一人のK先生のところで同じような問題が起こっていないか、聞いたところ、K先生のところでは音読テストを受けに来ないグループはないとのことであった。私が代行で授業をした時、E君の取り組みが悪かったと述べたが、K先生によると3クラス中で心配なのはE君だけだと言っておられた。でも、E君のグループの他の二人がうまくE君を練習に引き入れてくれて、音読テストの合格をしているとのことであった。「教師の働き掛けでうまくいかないことを、生徒たちの相互関係の中でやっていってくれるので、生徒の

持つ力はすごいですね」とK先生に話したら、「私もそう思います」と言っておられた。
M先生の担任クラスの男子の2つのグループについては、もう少し見守るべきか？

(6) 4時間目の授業

i) Aクラスの様子(2015年2月19日<木>)

ウェブ上にあったナビラとその父親のカラー写真を黒板に磁石で張り付けた。まず、資料3「マララとナビラ：天地の差」の記事を読み上げてやった。そしてPart4の後半部分のテープリスニング、「リズムよみ」の全体練習、グループ練習、音読テストと進んだ。プリントのカナふりのミスを発見した。Childを「チルド」とカナふりしていた箇所があったので、ある生徒はそのまま読んでいて、私も音読テストの時に気が付いた。

もう1ヶ所、Let's begin this endingの所のカナふりが、「レッツ ビギン ビギン エンディング」となっていたので、「レッツ ビギン ジス エンディング」に訂正するように、音読テストのグループが来るたびに伝えた。生徒たちもこの時はじめて、「あ、本当だ。違っている。気が付かなかった」と言う生徒もいた。このことは、生徒は音読をする時、分からない部分だけカナふりを見ているということを示している。カナふりのどの単語を見るかは、生徒によって違うので、最も力のない生徒に合わせて、すべての英単語にカナふりしておくのが賢明だろう。ここは最後のところだが、繰り返しも多く量も少なかったので、音読テストも早くでき、全員合格した段階でも、12～13分時間が余った。全員を席に戻らせ、課題プリントに取り組むよう指示した。生徒は黙々取り組んでいた。

ii) Bクラスの様子(2015年2月20日<金>)

昼食後の5限の授業であった。このクラスはこの時間帯はいつも特に落ち着きがない。予鈴が鳴り教室に向かう。席につきなさいと、大声で生徒たちに言う。2分後に本鈴が鳴っても、まだ全員着席していない。やっと着席して、起立礼のあいさつをした。そのあいさつの少し後、始業2分～3分後だろうか、女子生徒のMさんたちが2名ほど入室して来る。「今ごろ何だ？」と聞くと、「トイレ」との返答。本当にメリハリや緊張感に欠けるクラスだ。

授業手順はAクラスと全く同じ。資料3を配布すると、「もうマララとリズムよみは飽きた」とH君が大声で言う。静かにするよう告げて、資料3を私が音読する。その時にも私の目の前の男女のカップルのS君とIさんが私語をしたので、中断して私は彼らを睨み付けた。「マララは注目されたが、ナビラはアメリカでは無視をされたのは、アメリカはアフガニスタンのタリバン政権を武力で打倒したので、マララはタリバンから被害を受けているので利用価値があるけれど、ナビラのことはアメリカにとっては都合の悪い事なので、無視したいのだ」と言うと、「なぜ、アメリカはタリバン政権を打倒したのか」と生徒が言い出した。「9. 11事件の報復のためだ」と私は答えた。「オサマ・ビン・ラディンのこと？」と生徒は言う。

この時間のPart3の後半は、量も少なく繰り返しが多いので、音読テストはスムーズに進んだ。前の時間に不合格のY君とN君は、「今日は前の分もやるので、一度にいきなりやらせてほしい」と言ってきた。私は「まず、今日の分をやり、全グループが合格したら、前日分の音読テストをしてやる」と言った。彼らはこの時間に結局、昨日の分と今日の部分を合格した。要領のいい連中だ。余談になるが、この日の放課後は週末課題未提出者の居残り学習をするよう1週間前から連絡してあったのが、この2人は放課後の居残り学習には来なかった。なかなかと骨の折れる子どもたちである。翌日、どうやって叱ろうかと思案した。

その他に欠席のために音読テストの合格をしてなかった2名の女子生徒も、過去の音読テストを受けに来て、合格した。

全体としては、生徒たちは楽しそうに音読をしていたし、課題も一生懸命にやっていた。音読テストに合格したH君のグループの4名ほどが雑談をしているようだったので、「今は休み時間ではないので、課題プリントをやるか、学年末考査の勉強をなさい」と音読テストの合間に注意すると、「は～い」と返事だけは良かったが・・・。

授業の最後に課題プリントは来週の木曜日までに提出するよう、連絡をした。この時、H君が「出さなかったらどうなるのか?」と聞いてきたので、「全部出せば6点、出さなければ0点になるだけだ」と私は答えた。

このクラスで1時間授業をすると、毎時間本当に疲れる。この日も例外ではなかった。数週間前に、このクラスで授業を終えた後、「ああ・・・本当に疲れるなあ」と独り言をつぶやきながら階段を降りていたら、そのクラスのまじめな女生徒たちが横を歩いていて、その独り言を耳にして、「御苦労さまで〜す」「私たちのクラス疲れますよね。すみません」と私に慰めの声をかけてくれた。なんという面白い生徒たちだと思ったことを思い出した。

M先生が、今日の4時間目の授業では前回音読テストを受けに来なかった男子生徒たちは、落ち着いて受けたと言ってみえた。前回、けっこう「むっ」とした表情をしていたので、今回はやばいと思ったかもしれないとのことであった。また、今回は最初に音読テストの順番を黒板に書かせて予約させたところ、彼らは一番に書いて最初に音読テストを受けに来たとのことだった。音読テストの最初と最後は30分は違うので、いつ音読テストがあるのか分かっていようが生徒は音読の練習がしやすいと思うと私が言ったら、今日の授業を見ていてその通りだと思ったと言っておられた。後ろのほうに音読テストが当たっているグループは、前回もらった課題プリントをやっている場合もあり、生徒なりに時間配分を考えて行動しているみたいだと、私はM先生に言うと、納得してみえた。

(7) 群読はどのように評価すべきか (2月21日)

— (続) 山田昇司先生との対話 —

「リズムよみ」の音読グループテストが終わり、5時間目の群読練習とプレゼンの段階まで来た時、その実践にあたり幾つかの不安な点が出てきた。再び山田先生に以下のメールを送りアドバイスを求めたところ、そのさらに下段の返送メールが送られてきた。

山田先生

先週月曜日からマララの授業を始めました。

一番早いクラスで、昨日までで、4時間行い、プリントの「リズムよみ」音読テストを終えました。あとマララの授業に費やせる時間は2時間程度となりました。当初、群読のみきわめテストを考えていましたが、時間的に苦しいことが分かり、次のように計画を変更しました。

1. DVDを見せる
2. 群読のグループを作らせる。
3. 群読の音読練習をさせる。(マララになったつもりで読む)
4. 群読プレゼンをさせる。この時に、生徒に評価票を配布し、評価をつけさせる。

群読プレゼンは立候補でなく、全グループにやらせて、ここでABCの評価をつける。

- A 評価 (2点) 全体がそろって大きな声を出せて読めている。
B 評価 (1点) 全体で読めているが、声がそろっていなかったり、声が小さい人がいる。
C 評価 (0点) 全く声を出していない人がグループの中にいる。

上記の評価基準を生徒に周知して、評価させる。同じ評価に全体の7割以上の票数が集まったら、それをそのグループの成績とする。生徒の評価が分散したら、教科担任の評価をそのグループの成績にする。

この中で、問題は群読の音読練習の部分です。「リズムよみ」の場合は、ペンを打って声をそろえる具体的な動きがあるのでグループ練習しやすいのですが、ペアグループで群読練習をさせようとする、人数も多いし英文量も全部だし、練習自体が何か漠然としてしまい、生徒たちがしっかり練習するのかという不安があります。今考えているのは、プ

プレゼンの前に必ず教師の前でリハーサルを一度はするというにすることをすることです。
あと2時間の授業ができる」とすると、

- 1 時間目 DVD 視聴20分。群読グループ決め、群読練習、群読リハーサル25分。
- 2 時間目 群読グループ練習10分、群読プレゼン25分、授業の感想記入10分。

といったところですよ。

『英語教育が甦えるとき』（山田昇司著）の中の p.264 の他者評価は、個人プレゼンの前の「みきわめテスト」を受ける条件として行っているのですね。私は先生の群読プレゼンと個人プレゼンの授業過程を少し混同していました。群読プレゼンの前には、リハーサルをしたとの記述があったことに気がきました。

群読の授業の手順を以上のように考えました。また、お気づきのことがあったら教えてください。また、電話させていただきます。

2015年2月21日 岩間

拝復 岩間先生

群読に関しては、マララになったつもりで読む、という指示については、ただ単に「声を揃えてよむ」だけでいいと思います。さらに言いそえるとするならば「交互によむところは相手のグループの声をよくきいて」ぐらいですが、それすら言う必要ないかもしれません。

群読の評価については、前に出て揃ってよめればどのグループにも得点を与えるとしてはどうでしょうか。

この活動はあくまで「おまけ」のようなものです。ねらいは「リズムよみ」の復習もありますが、むしろ「協同学習」がうまく行ったかどうか、あるいはクラス全体で楽しむ活動として位置づけます。ですから、細かな評価をするよりも、もう一度聞きたいグループをひとつだけ投票で選ぶというだけでいいのではないのでしょうか。それで選ばれたグループにはプラス点を与える、としておけば外的動機付けとしては十分だと思います。投票については、個人ではなく、自分のグループ以外にグループで1票を投じるという方法も考えられます。

みきわめチェックは上手なグループは最後まで聞いてやる必要はなく「これなら大丈夫」と褒めてやるだけでいいと思います。時間が許すときは、下手なグループにやりなおしを命じることもありますが、時間の余裕がないときは、いいところを褒めてやって「ここもできたがんばれ」ぐらいに言っています。やる気があれば、あとは自分たちで練習すると思います。

とにかく、群読のねらいは「協同学習を楽しむ」ということです。このような活動はいまの高校の教室ではほとんど行われていないのではないのでしょうか。だとしたら、この活動自体に自体に価値があると思います。それをあまり細かく評価して序列化してしまうと、グループ活動をやって楽しかった、という気持ちが薄れてしまう可能性があります。

なお、発表の評価については、拙著『英語教育が甦えるとき』pp.91-93 に私が辿った試行錯誤の歩みが書かれています。

2015年2月21日 山田

以上のメールのやりとりをしてから、また電話で連絡を取り合った。

岩間 メールありがとうございます。群読プレゼンの評価についてですが、『英語教育が甦えるとき』pp.91-93には、寺島美紀子先生は◎と○の2段階評価となっています。私はつつい厳密に評価しなければいけないとの発想を持ってしまっているのですが、そのような2段階評価のような大雑把なものの方がいいのでしょうか。

山田 私も少し前まで、厳密な評価をすべきだと考えていました。ところが、そのような評価をしながらプレゼンをすると雰囲気は暗くなることに気がきました。すでに「リズムよみ」

音読テストを合格しているのに、「表現よみ」は余興、おまけみたいなものです。クラス全体で音読を楽しむという感覚が大切だと思います。個人プレゼンの場合は評価をしていましたが、群読では評価はしたことはありません。群読のプレゼンを前に出てきてすれば平常点を与えることにしてありました。つまり、プレゼンをやればどんなに下手くそでも、評価されるということです。学生たちは、人前でプレゼンをしなければならないとなると、結構一生懸命練習します。家でも練習してきます。やはり、いいところを見せたいのでしょね。

岩間 今回の実践の場合、最初は前に出てやるプレゼンは立候補でやってもらい、すべてのグループにやってもらうつもりはありませんでした。しかし、時間の都合上「群読みきわめテスト」ができなくなったので、すべてのグループにクラスの前でプレゼンをしてもらう計画です。たぶん1クラスに7つのグループができます。「リズムよみ」をした演説部分は通して読むと3分半かかります。全部プレゼンをすると、25分ぐらいかかりそうです。生徒たちはそれだけの長さのプレゼンをじっと聞いていられるかも心配です。

山田 3分半は少し長いですね。全体で25分も長いです。プレゼンする英文を少し短くするのも一つの方法ですね。2分ぐらいでもいいかなと思います。

岩間 なるほど。なんでもかんでも全部やらなければという発想は捨てた方がいいかもしれませんね。（しかし、マララ演説の音読テストで私たちがやった部分は、どこも読ませたいフレーズに溢れているので迷うなあ。最初の Why is it・・・? の下りも、どうしても読ませたい部分だし、Let this be the last time・・・下りも外せないし、どうしようか？やはり全部読ませるか？）

山田 あとは、聞いている生徒たちに評価させる時、短いコメントを書く欄も作っておくといいかもしれません。また、「もう一度聞きたいグループ選出」の投票は是非やるといいです。今年度の後期にバルジャンの葛藤の台詞である Who Am I の個人発表をしたのですが、あるクラスで全ての発表が終わった後に投票用紙を集めてその場で黒板に名前を書き出しながら開票しました。3名の選出でしたので発表者のうちの半数近くの名前が登場して大いに盛り上がりました。私が途中で「小学校の頃を思い出すね、学級委員の選挙みたいだ」と言ったときには「ほんまや」という反応といくつもの笑い声が返ってきました。

岩間 ところで、今このマララの授業の記録を毎日書いています。書いてみると、スムーズに授業ができていくクラスはほとんど書く事はありません。すべて順調に予定通りだからです。難しいクラスだと、困りものの生徒のことばかりが記録に残ります。これは一部の生徒のことなので、そんな生徒のことばかり書いた授業記録は、どんなものかなと思っています。読み手もそんなことばかりでは、読む気が失せるかもとも思うのですが・・・。

山田 実践記録は、うまく行ったところだけが書かれているものよりも、その先生が失敗したり苦しんだりしている過程も書き込まれた記録のほうが価値があると思います。先生の生徒の様子を書いた文章は、読んでいてハラハラ・ドキドキしながら、思わず引き込まれて読んでしまいます。

岩間 確かに、こんなふうによくいったという記録より、そのような記録のほうが親しみを持てることは確かです。読み手は自分の苦しみと重ね合わせて読めますから。私もそのような苦労が書かれた実践記録が好きです。ただ、だらだらとそんなことばかり書いてある実践記録も、どうなのかなと思っています。実践記録の書き方についても、先生にその一部を送りアドバイスをもらおうと思ったのですが・・・。

山田 いや、それには及ばないと思います。これまでの先生の記録を読ませていただきましたが、どれもとても面白かったですから。

(8) 5時間目の授業

「リズムよみ」のグループ音読テストが終わった後は、群読プレゼンを行うことになっていた。(2)の「授業の概要」で示した計画を、上記の「群読の評価はいかに行うべきか」の趣旨により、さらに変更してこの授業を行うこととした。以下に、その新しい授業計画を掲げる。これは2年生担当者に示された新しい計画である。何回も計画を変え、2年生担当者には本当に迷惑をかけた。

群読の練習と群読のプレゼンのやり方

変更点

- ①時間の関係で、群読をする英文の量を別紙のように半分ほどに減らします。
- ②群読プレゼンの評価は AB の 2 段階にします。(別紙の評価票を使用)
(細かく評価せず、ここでは音読をクラスで楽しめることを目標にするため。)
- ③群読グループ練習の時、先生のリハーサル指導を受けさせ、これを終えたらプレゼンができることとする。

授業手順モデル (2 時間でやる場合)

- 5 時間目 ①DVD 視聴 (20 分程度)
- ②群読プリントを配布して、群読部分の「リズムよみ」のクラスでの全体練習
 - ③群読グループを決める。
 - ④群読グループ練習。(群読は「リズムよみ」のままするかどうかは、グループの判断に任せる)
前に出てきて、すべてのグループにリハーサルをさせる。
(このリハーサルは、うまく読んでいるグループは途中で切って終わってよい。)
- 6 時間目 ①群読部分の「リズムよみ」のクラスでの全体練習のあとに、グループでの練習。リハーサルがまだ終わっていないグループがあれば、リハをさせる。
- ②群読プレゼンの発表順を決める。
群読プレゼン。前に出てきて音読させる。他の生徒たちは評価票に各グループの評価を記入しながら聞く。アンコールしてほしいグループには○を付ける。
 - ③アンコールしてほしいグループの投票結果を開票し、もう一度クラスの前でやってもらうよう要請する。(やってくれたら、ボーナス点 1 点を加える。
第 1 位のグループがアンコールに応じなかったら、第 2 位のグループにアンコールを打診する。)
 - ④授業の感想を書かせる。

<群読グループの作り方>

「リズムよみ」音読グループテストの 2～4 名のグループを、ペアにして作る。もし奇数で余るグループが出たら、人数の少ない群読グループに統合する。

黒板に「リズムよみ」音読グループを番号を付けて板書し、生徒たちにどのグループといっしょにやるか黒板の上で決めさせる。

i) B クラスの授業 (2 月 23 日<月>)

最初、DVD を見せるために、国際交流室に集まるように朝の SHR で指示をしてあった。先日トイレで授業に遅れてきた M さんたちが、またほんの少し遅れて来た。出席番号順に着席させた。H 君が「マララはもう飽きた」とまた、大声で言っていた。DVD を流そうとしたら、とても喧しかったので、「口を閉じなさい」と何度も注意した。やっと静かになり、DVD を視聴することができた。時折、H 君がブラインドを触って変な音を出したり、私語をしたりしていた。Y 君も時折私語をしたり、伏せてしまったりしていた。相変わらず落ち着かない。しかし、全体としては興味深そうに DVD を見ていた。20 分ほど DVD を見た後、教室に生徒を戻した。一番最後まで、国際交流室に残っていた Y 君が、後ろの掃除用具入れロッカーの扉を閉めていたので、「何をその中に入れたのだ？」と私が聞くと、中から N 君が出てきた。「何をしているんだ、もう」と思う。

教室に戻り、黒板にこれまでの「リズムよみ」の音読グループの代表者名とその後ろに人数を板書した。「クラスで 14 班あるけれど、2 つのグループを統合して群読のひとつのグループを作る。相談して決まったら、黒板に①+③というような形で書きなさい。そして班員名簿を持って行って、記入して提出しなさい」と生徒たちに言った。男子 7 班と女子 7 班あった。新しい群読グループとして、男子 3 班と女子 3 班が黒板に記入された。Y 君と N 君の 2 人グループ (男子)

と M さんたちの 4 人グループ (女子) が、余ってしまったので、この 2 つのグループが一緒になって男女混合でやってほしいと私は言った、嫌がるかなと思ったが、結構その後は楽しそうに練習を始めていた。

グループが決まるか決まらないうちに、私は何も指示していないのに各グループが音読練習を始めていた。それも「リズムよみ」の形でやっていた。勝手に生徒たちが練習を始めたのだが、あと授業時間が 10 分程度だったので、そのまま練習をさせておいた。「次の時間は、この新しい班でリハーサルをし、最後に発表をクラスの前でもらう予定です。評価は AB の 2 段階評価で行います」と言うと、Y 君が「僕らの読み方だと評価は B ですか」と言ってきた。「そろって読めていれば A、ばらばらにしか読めないなら B となります」と答えてこの授業は終わった。

ii) A クラスの授業 (2 月 23 日<月>)

A クラスの授業も、全く同じ手順で行った。B クラスより落ち着いているので、DVD も興味深そうにしっかりと見ていたと思う。DVD については、マララの最後の 6 分半の部分の演説を日本語字幕で見せた。その後、同じ DVD に入っていた BS スペシャル「不屈の少女マララ」の冒頭部分の 10 分程度を見せた。この後のマララへの NHK アナウンサーのインタビューも少し見た。これも生徒たちは興味深そうに見ていて、この途中で見せるのをやめなければならなかったのは残念だった。50 分の授業を前半後半に分けて、二つのクラスに DVD を見せていたので仕方のないことではあった。

教室に戻り、黒板に「リズムよみ」のグループを板書し、新しい群読グループを作るよう指示した。このクラスは「リズムよみ」音読グループが男子 4 班と女子 8 班があったので、単純に男子 2 班と女子 4 班の合計 6 班の群読グループができた。「役割の A と B をグループ内で決めて、班員名簿を提出しなさい」と指示をした。その後、「各グループで群読の練習をして下さい。そしてリハーサルを受けることができるグループは受けにきて下さい」と促した。

あるグループの女子生徒が「群読では、リズム打ちをして読むのですか」と質問してきた。「それは君たちに任せます。声がそろっていればいいので、声を合わせやすいほうでやって下さい」と私は答えた。しばらくすると、その女生徒のグループがリハーサルを受けにきた。わずかに音が外れたところがあったが、全体としては「リズムよみ」でよく読めていた。「お～、いいんじゃないの。うまい、うまい。また本番まで練習して下さい」と私は伝えた。この時間はこの 1 班だけがリハーサルをできた。「次の時間にリハーサルとクラスの前での発表をしてもらいます。また、課題プリントができている人は提出して下さい」と述べて、この授業は終わった。生徒たちは、これまでのグループより大きなグループがまた新鮮だったようで、AB に分かれた音読練習を楽しそうにしていた。

(9) 6 時間目の授業

i) A クラスの授業 (2 月 24 日<火>)

群読する部分は当初 File A を全部やるつもりであったが、3 分を超える長さだったので、5 時間目の段階で Part2 の終わりのところの Dear sisters and brothers, dear fellow children, we must work...not wait. のところから最後のところまでに変更した。これだと 1 分 35 秒程度で読める長さとなった。この部分を B5 1 枚のプリントにして、5 時間目に再度印刷したものを配布していた。

群読する部分のテープリスニングをまず行った。次にクラス全体で音読練習をすることになっていたが、時間があまりなかったことと、もうその必要はないと判断できたので、その全体練習は割愛した。いきなり、群読グループに分かれてグループ練習の時間を取り、その練習中に順次リハーサルを行った。このクラスの群読グループは全部で 6 班あったが、すでに 1 班はリハーサルを終えていた。黒板にリハーサルと書き、番号を 1 から 6 まで書き、1 の部分はすでに終了しているグループの代表者名を書き入れて、その名前の前に「済」と記入した。そして、残りの班に希望の順番の番号のところに代表者名を書き入れさせた。リハーサルでは結局すべての班が、ペンを打ちながらの「リズムよみ」をしていた。ペンを打ちながら流れるように、英文を最後まで

で一気に読み通す班があるかと思えば、一文ずつ止まっては次の文を読み始めるのに「せーの」と掛け声をかけてやっていたグループもあった。この掛け声については、「できたらその掛け声はなしでやれないか」と私は注文した。「えー！難しいな」という声があったので、「どうしても難しいならその読み方でもいいよ」と私は譲歩した。この掛け声は、もともとはクラスで全体練習をしていた時に、私がこのような掛け声をかけて生徒たちに読ませていたので、グループの音読テストでも、そのままその掛け声をかけながらやっているグループがあった。それが群読の練習の段階でも残ってしまった。

リハーサル後は、クラスの前での発表をした。発表順はくじで決めた。全生徒に評価票を配布して、全員そろって読めていれば A、バラバラになってしまうところが幾つかあったグループは B の評価を付けるように指示した。また、もう一度聞きたいグループを○で囲むことも指示した。評価票をみるとコメント欄もしっかり書いてあり、生徒たちはかなり厳密に評価をしていた。また、発表しているグループも聞いているグループも本当に楽しそうだった。評価を生徒たちにさせたものの、この楽しそうな雰囲気の中で、例えば最後にそのグループの A とか B の評価を発表するのは、ちょっと場違いの雰囲気となってしまうようで、やはり群読のクラス前での発表は基本的には評価しないことが、この授業の流れの中ではいいだろうと思った。すべてのグループの発表が終わったので、評価票を回収し、アンコールして聞きたいグループの票数を数える開票作業をクラスの前で行った。2グループに9票が入り、一番票数が多かった。その2グループにアンコールに応じてくれるか打診したが、2グループともそれは拒否したので、アンコールは聞けなかった。最後にマララの授業の感想を書かせてこの授業は終わった。

ii) B クラスの授業 (2月25日<水>)

この日も昼食後の5時間目の授業であった。教室の中が相変わらず騒々しい。授業が始まって、目の前の女生徒 H さんは数学のプリントをやっていたので「片付けなさい」と1, 2回指示をしたが、全く反応がない。無視されることはもっとも気分が悪いので、再度声を荒げて、「片付けなさい。横着すぎるだろう！」と怒鳴り声をあげてしまった。私も短気だなあと思った。もっとお釈迦様のようにならなければ・・・。

前の時間の群読プリントを出すようにクラス全体に指示をすると、そのプリントをなくしたので下さいと5～6名の生徒が取りに来た。「なくすなよ」「あきれなな」と腹をたてる。整理能力のない生徒が多い。

B クラスでは、群読グループが7班あったので、リハーサルとクラス前でのプレゼンが A クラスより時間がかかることが予想された。テーブリスニングと全体練習を省略して、いきなりグループ練習とリハーサルを始めた。「全体の英文を通して読むようにすること」と伝えた。リハーサルもすべての英文をやらず、途中までで終わらせたグループもあった。Y 君は「僕の成長を見て。ぱっちり読むよ」と言っている。リハーサルの時、文ごと止まって「せいのー」とタイミングを計る読み方をしたので、「切らずに続けて読んでほしい」と言ったら、「今までは切ってもよかったのに、何故いけないのか」と言い出した。「どうしてもできないなら、そのやり方でもいい」と譲歩したが、その後のリハーサルの続きでは私が指示したように読み始めた。

その後、クラス前での発表を行う。発表中に何人かの私語があったので、「聞くときは静かに聞きなさい」と注意しなければならなかった。本当に落ち着きがないなあ。グループによっては、途中でバタリと止まってしまう、そこの所からやり直すグループもあった。また、ひとりだけ Child をチルドと読んだりする子がいたり、強勢を置く場所がグループ内でズレてしまったりした場面もあった。そのたびに笑い声が聞こえたり、「がんばれ！」という掛け声がかけられた。やはり、これまでの2～4名の少人数のグループが6～8名の大人数のグループになると、全体で合わせて読むのが難しいようであった。発表するほうも、見ている生徒たちも、私もニコニコとして聞いていた。すべてのグループの発表が終わってから、評価票を集め、マララの授業の感想を書かせた時には、授業はあと6～7分しかなかった。なんとか時間内に予定の授業内容をやりきり、最終の授業を終わった。

授業の冒頭で叱った H さんの授業の感想を見ると、ただ一言「特にありません」という感想だ

った。よっぽど気分を悪くしたのかなと思い、あんな叱り方をしなければよかったかなあと考えた。

群読のクラスでのグループ発表について、お二人の担当の先生が次のようなことを言っておられた。他者評価をさせたところ、評価票にコメントをしっかりと書いていて、AB の評価もきわめて適切なものであり、感心したとのこと。私の場合も、発表中に若干の私語がみられたものの、評価票は多くの生徒がしっかりと記入をしていたし、その評価も私の感じたことと合わせて近いことが書いてあった。普段の生徒の集中力のなさを見てみると、クラス発表のとき、しっかりと聞いてくれるか心配していたが、ほとんどの生徒たちはどのクラスもとてもしっかりと聞いていたというのがその実態であった。

音読テスト合格後の課題は、読解プリント4枚と視写プリント2枚の計6枚を準備していた。授業の最終日を締め切りにしてあった。締め切り日までの提出状況は以下のようであった。

	在籍数	6枚全部提出	一部提出	全く提出なし
Aクラス	38	22	9	7
Bクラス	44	20	7	17

これまでは、学年全体で週末課題や長期休暇中の課題については、未提出の者は放課後に居残り学習をさせて、ほぼ100%提出させている。しかし、ほとんどが答えを丸写しにして提出するだけというのがその現状である。それも他の時間に内職してやっている場合もあったようである。このマララの課題プリントは、平常点を1枚につき1点ということを生徒に伝え、取り組ませた。学年担当者の間では、これまでの課題のように100%提出させることは目指さず、平常点で評価することを申し合わせていた。そのほうがこちらでも気が楽で生徒との緊張関係も和らいだ。

(10) 生徒の感想より

授業の最後に生徒たちにマララの授業の感想を書かせた。その一部を紹介する。

(Aクラスの感想)

¹ リズムをとるのに苦労した。みんなと息を合わせてリズムを打ちながら発音するのは難しかったけど、とても良かったと思う。マララさんの強調したい部分が、実際の「リズムよみ」を通して理解できたと思うし、本人の声を聴くと本当に強い思いで言葉を伝えているなど感じる事ができた。自分もマララさんみたいに、日本語や英語でしっかりと気持ちをのせて言葉を伝えていければいいなと思いました。

² 最初はぜんぜん声そろわなかったり、リズムが取れなかったりしたけど、何回もグループ練習をしてそろようになり楽しかったです。そしてどこが強く読まれているのか分かったし、マララさんのように読めたら理想だなと思いました。これからも強調する部分や、伝えたい部分を気持ちを込めて読んだりしていきたいです。

³ ……みんなと一緒にやることによって、楽しく取り組むことができた。ある所からある所までを同じ速さで読むことで、よりうまく発音できることが分かったから、それに気をつけてこれから英語の授業を受けたいと思った。

⁴ 発音の勉強がよくできたと思う。with us をウィズ・アスではなくウィザスなどスラスラ言うには、どう音をくっつけたらいいか学べた。そして、強弱をつけるとより発音しやすくなったし、文も覚えやすい。舌をどのように使えばうまく発音できるんだろうと練習に苦労した。家でも練習したし、いい経験になった。パキスタン人なので、英文もわりと簡単だったし、イギリス英語なので聞き取りやすくてよかった。また、やりたい。

⁵ 「リズムよみ」をするとき、はやく読まなければいけないところが、けっこう難しかったです。2つのグループが集まった時に、ゆっくりのチームとすごくはやいチームだったので、合わせるのが大変でした。マララのビデオを見て中途半端なところで終わっていたので、続きが気になります。こういう授業は面白くて楽しいけど、それもマララの周りの女の子たちは受けることがで

きないと思うと、自分は今幸せだと改めて思いました。発展途上国についてもっと知りたいと思ったし、イスラム国のことでイメージが悪くなっていたけど、マララみたいな子もいるのだと思った。

⁶ 世界には、学校に行きたくても行けない子や、学びたいのに、お金や機会がなくてできない子がたくさんいて、自分たちが、日本が、どれだけ平和でめぐまれているかを痛感しました。世界が動き出すことで、多くの子どもたちが学習の機会を得られるようになってほしいです。でも、マララさんが注目されている背景に「過激派への攻撃の合理化」が見えて、その戦争によって無関係な多くの人々が傷ついていることに、誰もほとんど見向きもしない事も分かりました。

⁷ マララは私たちと同じ年ぐらいなのに、あんなにすごい演説をしていて、私には絶対できないことだし、マララの演説のおかげで勇気をもらった人がたくさんいるから、マララの演説はすごいと思った。

⁸ 演説が長いので発音するのが大変だった。マララの演説の内容がすごく感動的だった。メンバーで教えあってやれたのが楽しかった。同じ言葉がよく出てくるので覚えやすかった。

⁹ 何度も同じ言葉が使われていてすごい説得力のある演説だった。自分たちと同世代なのに、先頭に立って教育を受ける権利を女性にも与えられるように呼びかけていて、すごいと思いました。このマララ演説の授業を通して自分たちとは違って苦しんだり、つらい思いをしたりしながら生活している人がいるのを知り、今の生活が当たり前じゃないんだと思いました。

¹⁰ 資料で配られた無人機の爆撃によって、おばあさんを亡くしてしまった女の子（ナビラ）の話はひどい話だと思った。また、いろいろ調べてみようと思うきっかけとなった。

¹¹ 「リズムよみ」とか、視写プリントをする時間があるなら、テスト勉強にまわしてほしいかったです。(筆者の注：次の週から学年末考査が予定されていたのでこのようなことを書いていた。)マララの勉強はためになったし、世界の現状を知ることができました。そしていかに自分たちが恵まれた環境にいるか分かりました。これからはこの幸せをしっかり感じて勉強したいです。

(Bクラスの感想)

¹ 発音の難しいところを、ペンのたたく間に入れるのが難しかった。マララさんの演説は **You Tube** で探すほどハマりました。

² マララの演説の授業を受けて、英語の勉強にもためになるけど、人間として考えさせられることがたくさんありました。身近に感じられないような感じだったけれど、授業で学んでいって改めて思うこともありました。いい授業だと思う。

³ 同じ年代の少女の演説とは思えない素晴らしさでした。マララも英語が母国語というわけではないのに、ここまで文を作れるというのがすごいと思いました。私たちは恵まれているので、もっとがんばらなくてはいけないと思いました。

⁴ マララ読解プリントはとても苦労したけど、その分演説内容がよく分かって良かったです。また、だんだん英文を読むことに慣れることができました。 **Let this be the last time** マララのプリントは！

⁵ 全員で楽しく毎回練習できたりして楽しかったです。読み方が難しかったりしたら、みんなで教えあったり・・・とりあえず楽しかったです！

⁶ 発音が難しかった。人数が増えるほど合わせるのが難しくなり大変だったけれど、楽しかった。あんな大勢の前で堂々と発表したマララが素晴らしいと思いました。

⁷ 「リズムよみ」に苦労した。それよりもっとマララについての映像を見ていた方がためになったと思う。

⁸ はじめは何を言っているのか分からなかったけど、時間がたつにつれて、理解できた。マララの命がけの演説は本当にすごいと思った。カッコいいと思った。

⁹ とても興味深い内容の演説でした。「リズムよみ」では普通に読むことはできても、リズムをつけて読もうとするとテンパって読めなくなるのでとても難しかったです。「リズムよみ」よりも、もっと演説の内容について学習したかったです。

¹⁰ マララさんの言うことは、正しいと思います。発音のリズムもすごく難しかったけど、楽しく取り組みました。強弱の付け方がよく分かりました。

¹¹ 「リズムよみ」が楽しかった。群読がそろわなくて難しかった。マララは16歳なのに一人

でがんばっていてスゴイと思った。テスト勉強の時間がほしかった。

¹² もっとテスト勉強やセンター対策をしてほしかった。

¹³ 「リズムよみ」をすることで、文の強弱の付け方や文の区切りが分かりやすかったのでよかった。音読の授業で前よりマララの演説が聞き取りやすくなった。

¹⁴ 「リズムよみ」のときがすごく楽しくて良かった。難しいところもあって苦労したけど、最後にはちゃんと読めたし、楽しかった。マララの演説はなかなか興味深くて、人権について、少ししっかり考えてみるべきだと思った。

¹⁵ マララの演説には感動した。初めて聞いて私たちとほぼ同じ年齢なのにすごいなと思った。プリントでしっかり学習できた。マララのことがよく分かって理解できた。

(追記) 上記の「¹² もっとテスト勉強やセンター対策をしてほしかった。」との感想に対して、私は次の時間に以下のように授業でコメントした。「センター対策としても、マララの演説は最適の教材だ。授業では演説のほんの一部しか扱えなかったが、もしセンター対策を考えるなら、27分の演説の全文を辞書で調べながら読んでみてほしい。この演説には、センター試験などの入試に頻出する語彙や熟語がいっぱいある。また、英文の難易度もセンター試験レベルのものである。英文とその訳もウェブ上で簡単に入手できる」と私は話した。この話を、この感想を書いた生徒は不安そうな表情をしながらも、真剣に聞いていた。

(11) 授業を終えて

楽しみにしていたマララの授業も終わった。この授業の学年への提案者の立場である私としては、この授業がとにかくうまくいくこと、担当者全員がやってよかったと思える授業になることを祈るばかりであった。今、授業を終えて、上記の授業記録で分かるように個々には様々な問題もあったが、生徒たちが本当に楽しそうに音読練習をし、音読テスト、群読プレゼンをしてくれたことに、大きな喜びと満足を感じている。

「リズムよみ」から「群読」さらには「表現よみ」がどのように移行していくのかがイメージが掴めていなかった。今回行った「群読」では、「全員が揃ってよめること」と指示をただけだった。その結果、すべてのグループがリズムよみで群読をした。2～4名の少人数の「リズムよみ」に比べ、「群読」は6～8名での「リズムよみ」だったので、難易度が高くなったようだった。少人数では音読は詰まらなかったのに大人数になったために強の位置がずれたり、途中で止まってしまったグループもあった様子からもそのことが分かる。今回行った「リズムよみ」の群読では、まだ「表現よみ」の段階まで至っていない。今後、そのような段階にもっていくには、どのようにすればいいのか、機会があれば探究してみたい。

今後今回のような授業をできる機会があるのかどうかは分からないが、このような詳細な授業記録は、再びこのような授業をしようとする時は、必ず役に立つだろう。

この1月から2月は、マララに明け、マララに暮れた2ヵ月であった。

おわりに

「リズムよみ」から「群読」「表現よみ」への授業方法は、授業以外でも使えそうな音読指導である。英語教師をしていると、授業以外でも英語の音読指導をする機会がある。

昨年度は教育委員会主催の高校生スピーチコンテストに3名の生徒を引率した。毎年、一人以上参加者を募ってほしいと要請される。その生徒を見つけるのも結構手間がかかった。さらに3人にスピーチを日本語で書かせて、それを英訳してやって、ALTに添削してもらった。その後、私の音読を聞かせて生徒たちに練習させた。この時、「リズムよみ」のことが頭をかすめたが、実際に読む時はそのような読み方はしないのと思って、「リズムよみ」をしなかった。でも、最初に「リズムよみ」をさせてから、スピーチの準備として「表現よみ」に移行する方法もあったのかなと思う。あるいは、スピーチ原稿を作成させる時も、反復や対比を効果的に使っているマララ演説はとても参考になるものであると思う。日本語ででもいいのでマララの演説を読ませて、生徒たちにスピーチ原稿を作らせていたら、もっといい原稿を作らせることができたかもしれない。

また、私は校内ではオーストラリアの姉妹校との交流の世話をしている国際交流係をしている。今

年度の8月に、本校生徒が25名オーストラリアを訪問した。その時に、日本昔話の紙芝居を作成して生徒たちが英語で昔話の朗読をするプレゼンがあった。しかし、引率者の話によると、生徒たちのプレゼンはとても小さな声で何を言っているのか分からなかったもので、残念だったとの話を聞いた。このプレゼンの指導も私がしていた。夏休み前まで生徒たちを毎週放課後に集めて、事務的な手続き作業や紙芝居作り、そしてプレゼンの準備をしていたのだが、私一人では指導が行き届かなかったこともあり、残念な結果を聞くことになってしまった。この時も、作成の手間暇を惜しまずに、日本昔話をカナ振りをした「リズムよみ」プリントを使って練習させていたら、違う結果となっていたかもしれない。

いずれにしても、この「リズムよみ」の音読指導は、様々な場面での大きな効果と可能性を秘めていると思う。

マララ演説の授業については、私の勤務する学校では、1年生の英語担当者も総合学習の時間を使って、演説の訳を生徒にさせたとの話を聞いた。また、毎年1回発行されている岐阜県の英語部会の会報の編集後記にも、マララ演説のことが触れられ、その編集後記を書かれた先生も自分の学校で教材として取り上げたことが書かれている。このマララ演説は今後ますます多くのところで、英語の授業に使われるだろう。それほどこの演説は英語教材として魅力があるのである。そうであるからこそ、この演説によって「アメリカの世界における戦争政策は正しい」のだと、心に刷り込まれる危険性がある。そのような危険性を感じる英語教師がどれだけいるのか、むしろ全く無頓着な英語教師が多いのではないのかと私は危惧している。そのような危惧を感じて、私はパキスタンにおけるアメリカの無人機による爆撃とその犠牲者についての記事を、資料2「米国無人爆撃機による爆撃被害者」File Fと資料3「マララとナビラ：天地の差」File Gを授業の中で紹介した。しかし、これでもきっとまだ不十分だろう。この問題への対処方法をさらに掘り下げていく必要性を強く感じる。

私は昨年3月に定年退職をし、今年1年間は再任用職員として勤務した。この3月でこの再任用職員も退職になる。したがって、正教員としての授業はこの2月で最後の授業となる。そんなこともあって、このマララの授業は万感の思いを胸に秘めて取り組んだ。有終の美を飾って、生徒の心に何かを残せる授業をしたいという強い願いがあった。力量不足から、これまで十分に満足のいく授業をしてこなかった私にとっては、それは本当に切実な思いであった。そしてこのように詳細な授業記録を取ったのは、初めてのことであった。

若いころからこのような詳細な授業記録を取る習慣があったならば、私ももう少しいい授業ができる教師として成長できていたのかもしれない。私の現在置かれている立場は、担任もなければ分掌の部長をしているわけでもないもので、他の先生たちに比べれば余裕のある立場である。そのような環境に置かれて初めてこのような記録を書くことができた。現在の多くの教師たちが置かれている多忙な環境では、こんな細かくて面倒な実践記録を書いている時間と精神的ゆとりなどないだろう。職場の多忙化はいい教育を作る上では、百害あって一利なしということを実感している。

そして私がこのような授業記録を綴ったのは、自分の正教員としての最後の授業の様子や教室の中での出来事を記録として残したかったからだ。何に腹を立て、何を不安に思い、何に失望し、何に喜びを見出したのか。そんな平凡で些細なことが授業では毎時間積み重ねられていく。その記録のひとつである本論文は、私が英語教師として生きてきた証のひとつでもある。

(2015年3月14日)